

談話の観点から見たフランス語の時制 — 大過去を中心に —

1. はじめに

- (1) 学生から次のような質問を受けた。この質問は意味のある質問か、それとも馬鹿げた質問か。

問題：「彼はドアに鍵をかけると、外出した」をどう訳すか。

正解：Il a fermé la porte à clef et (il) est sorti.

疑問：「彼は外出した」は過去の出来事であり、複合過去で表されている。「彼はドアに鍵をかけた」はそれより前の出来事なので、大過去になるのではないか。

- (2) 朝倉季雄『フランス文法事典』白水社（1955 旧版）の« Plus-que-parfait »の項目に次の記述がある。

「正規の構文では、主節の単純過去、複合過去に対して、時を表す従節に大過去を用いない。従って *Quand il avait fini, il s'en alla.* は正しくない。

（正：Il avait fini, quand il s'en alla. 或いは陰影は異なるが、*Quand il eut fini, il s'en alla.*）」

ただしこの記述は『新フランス文法事典』（白水社 2002 新版）では削除されている。

- (3) 朝倉季雄『フランス文法メモ』（白水社 1984）に次の記述がある〔現在では朝倉季雄『フランス文法集成』白水社 2005 に収録〕。

「時況節の動作が終わったときに、主節の瞬間的動作が行われたことを表そうとする場合、次のような構文が考えられる。

5) *Je suis parti quand il avait terminé son discours.* — Sauvageot, *Procédés*, 161.

彼が話を終えた時、私は帰って行った。

だが、この構文はほとんど用いられない。Olsson (141-2)は単純過去形を 2 例、複合過去形を 1 例集めただけである。

注) Olsson, L, *Etudes sur l'emploi des temps dans les propositions introduites par quand et lorsque et dans les propositions qui le complètent en français contemporain*, Uppsala, 1971. インフォーマントはこの構文を知らないし、Gougenheim はこの構文を容認しない。

『単純過去形・複合過去形に対して、大過去形も先立性を表すが、時況節では用いられない：[...] Il avait fini, il se leva. 「彼は終えてしまうと立ち上が

った」。しかし、*Quand il avait fini, il se leva.*は不可。』 — *Système*, 211.

注) Gougenheim, D., *Système grammatical de la langue française*, d'Artrey, 1939. Martinon (353)は〈*quand*＋大過去形〉が習慣を表す半過去形に置かれた主節と共に用いられた構文(例 3)しか認めない。

例 3 : *Lorsque j'avais fini mon travail, je descendais dans le jardin.* — Cressot, *Style*, 130 私は仕事を終わると、庭に降りたものだ。

注) Martinon, Ph., *Comment on parle en français*, Larousse, 1927. この使用制限は〈*quand*＋半過去形〉が主節の単純過去形・複合過去形に応じて用いにくい(p. 91)のと平行して考えられるが、大過去形のほうがさらに厳しく制約を受ける。

例 5 は次のように書きかえれば常用文となる。

Il avait terminé son discours quand je suis parti.

Quand il a eu terminé son discours, je suis parti.

Quand il eut terminé son discours, je partis.

Alors qu'il avait terminé son discours, je suis parti.

◇ *alors que* は *quand* と異なり、*alors que*＋半過去形、(主節:) 単純過去形(複合過去形)も常用される : *Le 8 mai 1943, vers dix heures du soir, alors que je lisais, j'entendis une voiture.* (Gary, *Cerfs-volants*, 292)」

(4) インターネット上の WordReference のフォーラムに次のような投稿がある。

Bonsoir à tous !

Aujourd'hui j'ai lu dans une grammaire les phrases suivantes :

« *Quand il avait fini de lire, il dormait un peu.* »

« *Quand il eut fini de lire, il dormit un peu.* »

La grammaire explique la différence entre l'emploi du plus-que-parfait et du passé antérieur. Dans la première phrase on met l'accent sur le caractère habituel du procès, alors que la deuxième exprime la réalisation du procès.

En lisant ces deux exemples, j'ai pensé que dans la langue de tous les jours on n'utilise pas le passé simple, mais le passé composé. Si on met la deuxième proposition « *il dormit un peu* » au passé composé « *il a dormi un peu* », dans quel temps doit-on mettre la première proposition ? Jusque maintenant, je pensais que c'est le plus-que-parfait qui exprime cette antériorité, mais d'après tout ce que je viens de lire ces derniers temps, je m'en doute. Il n'y a pas si longtemps, je lisais quelque chose sur les temps surcomposés sur ce forum. Un temps surcomposé pourrait-il bien être la réponse à ma question ?

« *Quand il a eu fini de lire, il a dormi un peu.* »

Y a-t-il d'autres possibilités quoi faire avec la première proposition ?

(<https://forum.wordreference.com/threads/quand-temps-passé-composé-plus-que-parfait-passé-antérieur-passé-surcomposé....1312308/>)

(5) 英語では〈when 節=過去完了形—主節=過去形〉の組み合わせは何の問題もなく用いられる。

a. When he *had made* his speech, he *sat* down and *wiped* his forehead.

スピーチを終えると、彼は腰を下ろして額を拭った。

b. When the Iraqis *had attached* Israel, the Israelis *did* not retaliate at once.

イラク人がイスラエルを攻撃したとき、イスラエル人はすぐには反撃しなかった。

(レナート・デクラーク『現代英文法総覧』開拓社、1994)

したがって、フランス語の大過去形は英語の過去完了形とは異なるものだと考えざるをえない。しかしどこか異なるのだろうか。

(6) 朝倉季雄『新フランス文法事典』(白水社 2002 新版) の« Plus-que-parfait »の項目 (p. 403) に次の記述がある。この記述は正しいか。

「複過が直・現に後続し (→ *passé composé* II, A, 3⁰)、前過が単過に後続する行為を表すことがあるように (→ *passé antérieur* II, 1⁰)、直大も他の過去時制で表された行為より後で行われた行為を表しうる。

Joseph le vit remettre ses gants et s'éloigner entre les arbres. Au bout d'une minute, Praileau *avait disparu*. (ID, *Moïra*, 245)

ジョゼフは彼がまた手袋をはめ、木立の中を遠ざかっていくのを見た。1 分後にプレーローは姿を消していた。

Vous lui avez fermé la bouche en l'embrassant, mais le lendemain matin, vous *aviez oublié*. (Butor, *Modif.*, 145)

あなたはキスをして彼女の口をふさいだが、翌朝には忘れていた。」

(7) 朝倉季雄『新フランス文法事典』 *passé composé* II, A, 3⁰

叙述的現在形の完了：直・現に後続する複過

La voiture démarre, elle a déjà atteint le bout de la rue. Elle a franchi la lueur du dernier lampadaire. Elle est entrée dans la nuit. Elle n'existe plus. (Anouilh, *P. R.*, 240)

(走り去る車の後を目で追いながら) 車が動きだしたわ。もう通りのはずれよ。最後の街灯の光も通り越したわ。闇の中に入ったわ。もういないの。

▶ *démarrer*, *atteindre*, *franchir*, ... は相次ぐ行為。複過の使用は完了相で表わそうとしたため、時間的に複過は直・現に後続している。

(8) 朝倉季雄『新フランス文法事典』 *passé antérieur* II, 1⁰

前過は完了相を表すだけで、時間的に単過に後続し得る。

Il gratta une allumette que le vent *eut vite éteinte*. (Bedel, *Jérôme*, 104)

マッチをすったが風がすぐにそれを吹き消した。

Il (...) se promet d'enquêter dans son entourage, mais il *eut* bientôt cessé d'y penser.
(Aymé, *Chemin*, 8)

周囲の人達に聞いてみようと思ったが、じきにこのことは考えなくなってしまった。

(9) 物語の中には大過去で始まるものがある。「開始の半過去」(imparfait d'ouverture)になぞらえて「開始の大過去」(plus-que-parfait d'ouverture)と呼ぶことができるこの大過去はどのように考えればよいだろうか。

D'une longue planche posée sur le tronc d'un chêne, Delphine et Marinette *avaient fait* une balançoire. Quand l'une touchait la terre, l'autre se trouvait si haut perché que le monde lui paraissait bien plus grand. Marinette ne pouvait pas s'empêcher d'avoir peur un peu. Elle riait quand même, et avec la main, elle faisait des signes à une petite poule blanche qui la regardait depuis le seuil du poulailler.

(Marcel Aymé, *Les Contes du Chat perché*)

檜の切り株の上に置いた長い板で、デルフィーヌとマリネットはシーソーを作っていました。一人が地面に着くと、もう一人は空高く舞い上がるので、世界はずっと大きく見えました。マリネットは恐い気持ちを抑えることができませんでした。それでも彼女は笑い、鶏舎の入り口から彼女を眺めている白い小さな雌鶏に手で合図を送るのです。朝倉季雄『新フランス文法事典』には次の記述がある (p.403)。

「物語冒頭の直・大。物語の対象に先立つ事実を語って読者の好奇心をそそる。Elle *avait eu*, comme un autre, son histoire d'amour. (Flaubert, *Cœur* II の冒頭) 彼女にも人並みに恋愛沙汰があった。」

2. 談話の観点から時制を考察する

(1) 時制の定義

最も一番的な定義は次のようなものだろう。

「時制とは、動詞の活用語尾によって、出来事の時間軸上の分布を示す形態・意味論的要素である」

(2) 伝統文法の時制研究の不備

伝統文法では、ひとつひとつの時制の意味価値をばらばらに記述し、用法を列挙するのが通例である。

例：目黒士門『現代フランス広文典 改訂版』（白水社、2015）

§ 235 直説法複合過去

(1) 過去 日常語で、現在と切り離された過去の出来事を述べる時に用いられる。文語では単純過去を用いる。

Hier, il *a plu* toute la journée. きょう一日中雨が降った。

(2) 現在完了 過去に完了した行為を現在との関連で表す。読者の身近な経験を

語ることが多い日常語では、複合過去はしばしば現在完了を意味する。

- ① 現在までに完了した動作、あるいはその結果としての現在の状態を表す。

J'ai déjà réparé ma bicyclette. 私はもう自転車を修理した。

- ② 現在までの経験を表す。

Avez-vous jamais pensé à cela ? それを考えたことがありますか。

- ③ 現在まで反復された行為または現在までの継続的状态を表す。

Il est parti depuis dix minutes. 彼が出て行ってもう 10 分になる。

(3) 前未来の代用

- ① 未来のある時に完了している行為を表すために、前未来の代わりに複合過去を用いることがある。

Attendez un peu. J'ai fini dans un quart d'heure. (=J'aurai fini)

ちょっと待ってください。15 分後には終わっていますから。

- ② *si* で始まる条件節では前未来を用いることができないので、前未来に代わって複合過去を用いる。

Si vous avez fini avant deux heures, vous m'en avertirez.

2 時前に終わったら私に知らせてください。

(3) 伝統文法の時制研究に欠けているもの

a. 時制体系の全体像が示されていない。

時制はひとつの体系を成す。「体系を成す」とは、時制のひとつひとつがばらばらに働いているのではなく、お互いに関係・対立しながら働いているということである。伝統文法は時制をばらばらに記述するだけで、全体像を示していない。

【例外】

- ① Damourette, J. & E. Pichon, *Des mots à la pensée*, d'Artrey, 1911-1940.

noncal / toncal のふたつの領域を設定して、時制同士の関係考えた。

- ② Reichenbach, H., *Elements of Sybolic Logic*, The Macmillan, 1947.

現在時 (S)、出来事時 (E)、基準時 (R)を用いて英語の時制の全体像を示した。

- ③ 井元秀剛『中級フランス語 時制の謎を解く』白水社、2017.

メンタル・スペース理論を援用して時制の全体像を提示した。

b. 単文中心であり、より大きな談話の中での時制の働きを考察していない。

伝統文法は単文中心であり、せいぜい 2 つの文程度しか考察の対象としていない。時制は優れて「談話的現象」である。時制の働きを本当に明らかにするためには、談話理論が必要である。

【例外】

- ① ハラルト・ヴァインリヒ『時制論 文学テキストの分析』紀伊國屋書店、1982

(原著 Harald Weinrich, *Tempus. Besprochene und erzählte Welt*, 1964)

「語りの時制」「説明の時制」という区別を用いて、テキスト言語学の立場から

「前景」「背景」の重要性を論じた。

- ② Kamp, H. & C. Rohrer, “Tense in Texts”, R. R. Bauerle et al. (eds) *Meaning, Use and Interpretation of Language*, De Gruyter, 251-269, 1983.

談話表示理論 (Discourse Representation Theory)の立場から時制のテキスト機能を論じた。

- ③ Declerck, R., *Tense in English. Its Structure and Use in Discourse*, Routledge, 1991.
Declerck, R., *The Grammar of the English Verb Phrase*, Vol, 1 *The Grammar of the English Tense System*, Mouton de Gruyter, 2006.

デクラークの時制理論の概要は、レナート・デクラーク『現代英文法総覧』開拓社、1994. の第 3 章「時制」 (pp. 118-211)で知ることができる。

(4) 談話の定義

談話とは、話し手と聞き手の相互行為 (interaction)として、時系列に沿って局所的に構築されかつ理解される、累積的な (cumulatif) 心的表示 (représentation mentale) である。

(5) 談話の観点から時制を考察するとはどういうことか

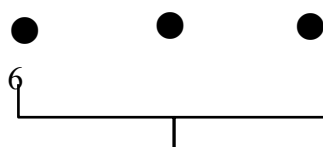
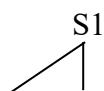
談話を累積的な心的表示と定義することから次のことが帰結する。

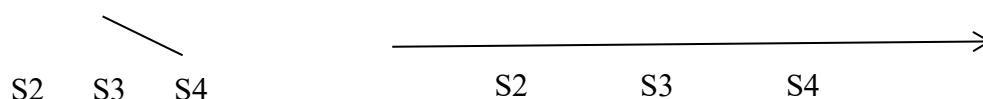
話し手の談話理解という側面から、3つの文から成るミニ談話 $D = \{ S1, S2, S3 \}$ を考える。聞き手の談話理解は次のようなプロセスをたどる。

- ① 聞き手は S1 を、それまでに獲得し保持している「世界の知識」と相対的に理解し処理する (たとえフィクションの理解においてもそうである)。
- ② S1 の処理結果は、S2 の処理の入力となる。つまり S2 は単独で処理されることはなく、S1 の処理結果と相対的に理解される。
- ③ S1 と S2 の処理結果は、次の S3 の処理の入力となる。
- ④ $D = \{ S1, S2, S3 \}$ がばらばらの 3 つの文の集合ではなく、お互いに意味的に関係のある文の集合であるとするならば、 $D = \{ S1, S2, S3 \}$ はひとつの「エピソード構造」を成す。エピソード構造において、 $\{ S1, S2, S3 \}$ は横並びの並列関係を持つことも、また階層的関係を持つこともある。

- (6) L'été de cette année-là vit plusieurs changements dans la vie de nos héros. (=S1)
François épousa Adèle (=S2), Jean-Louis partit pour le Brésil (=S3) et Paul s'acheta une maison à la campagne. (=S4) (Kamp & Rohrer 1983)

その年の夏にはこの物語の登場人物たちの人生にいくつもの変化があった。フランソワはアデルと結婚し、ジャン・ルイはブラジルに行き、ポールは田舎に家を買った。





上の例で S1 は {S2, S3, S4} 全体を包摂する上位の出来事であり、{S2, S3, S4} は S1 の部分出来事として並列関係にある。時間的には、S1 はその年の夏全体を領域とするが、{S2, S3, S4} はもっと短時間で完了する出来事である。また、{S2, S3, S4} の順番は語られた順ではなく、実際にはどのような順番で生起していてもよい。

3. 絶対時制と相対時制

(1) 絶対時制・相対時制という概念は 18 世紀に遡る。

Lorsqu'ils représentent le temps de l'événement par la seule comparaison avec celui où l'on parle, il sont *Temps absolus* ; lorsqu'ils le représentent par une double comparaison, non seulement avec le temps de la parole, mais avec celui de quelque événement, ils sont *Temps relatifs*. (Girard, Abbé, *Vrais principes de la langue française*, 1747)

時制が話している時との関係だけによって出来事時を表す場合、それは絶対時制である。話している時だけでなく、別の出来事の時との関係において出来事時を表す場合、それは相対時制である。

(2) Girard (1747) は絶対時制と相対時制を次のように分類した。

Indicatif	Absolus	Relatifs
Présent	je fais	je faisais
Prétérit	j'ai fait	j'avais fait
Aoriste	je fis	j'eus fait
Futur	je ferai	j'aurai fait
Subjonctif		
Présent	je fasse	je fisse
Prétérit	j'aie fait	j'eusse fait

【例示】

a. 半過去

Pierre est entré dans la cuisine. Marie *faisait* du café.

ピエールは台所に入って行った。マリーがコーヒーを淹れていた。

→ *faisait* は *est entré* との同時性を表す。

b. 大過去

Doug releva ta tête. Toute trace de lassitude *avait disparu* de son visage.

ドゥーグは顔を上げた。疲労の影は顔からすっかり消えていた。

→ *avait disparu* は *releva* に対して先行・完了を表す。

c. 前過去

Quand il *eut achevé*, tous demeurèrent silencieux.

彼が話し終わると、皆はひっそりとした。

→ *eut achevé* は *demeurèrent* に対して先行・完了を表す。

d. 前未来

Quand vous *aurez lu* ce livre, je vous en prêterai un autre.

この本を読んでしまったら別の本を貸してあげましょう。

→ *aurez lu* は *prêterai* に対して先行・完了を表す。

(3) 考察

(A) 絶対時制・相対時制の区別は、単純時制・複合時制の区別と一致しない。単純時制の多くは絶対時制だが、半過去は相対時制である。複合時制の多くは相対時制だが、複合過去は絶対時制である。

(B) 現在では絶対時制・相対時制に代わって、直示的時制 (*temps déictique*)、照応的時制 (*temps anaphorique*) という用語が使われることが多い。

(C) 絶対時制・相対時制という概念の歴史的変遷については、Vetters, C., *Temps, aspect et narration*, Rodopi, 1996.が詳しい。

(D) 従属節の時制は主節の支配を受けるため相対時制となる。

i) Anne-Marie m'a dit qu'elle *était* malade depuis trois jours.

アンヌ・マリーは3日前から病気だと私に言った。

ただし、関係節は例外で、主節の支配を受けても受けなくてもよい。

ii) Yvonne a mis dans le frigo les tomates qu'elle *{avait / a}* achetées au marché.

イヴォンヌは市場で買ったトマトを冷蔵庫に入れた。

→ 主節の支配を受けると大過去 *avait achetées* に、受けないと複合過去 *a achetées* になる。

(E) 独立節は前の文の支配を受けることも、受けないこともある。受けたときは相対時制で、受けないときは絶対時制となる。

i) Le directeur est parti pour Londres. Il ne *reviendra* que lundi prochain.

部長はロンドンに行った。月曜まで戻って来ない。

→ *reviendra* は発話時現在を基準としていて前文の支配を受けない。

ii) Le directeur est parti pour Londres. Il ne *reviendrait* que lundi prochain.

部長はロンドンに行った。月曜まで戻ってこないのだった。

→ *reviendrait* は *est parti* の時点から見た未来を表し支配を受けている。

(F) 単純過去は従属節に生じて相対時制となるか？

a. Elle naîtra, fera de bonnes études, s'occupera de politique et évitera la troisième guerre mondiale. On dira après sa mort qu'elle *fut* une héroïne. (communication personnelle de N. Ruwet, exemple cité dans Vetters, C., *Temps, aspect et narration*, Rodopi, 1996.)

彼女は生まれ、よい教育を受け、政治に携わり、第 3 次世界大戦を防ぐだろう。彼女の死後、皆は彼女は女傑だったと言うだろう。

- b. Dans 20 ans, on comprendra que Robert Kennedy *fut* un homme politique plus important que son frère John. (Vetters, *op. cit.*)

20 年後には、ロバート・ケネディは弟のジョンよりも重要な政治家だったことをみんな理解するだろう。

Vetters はこの例をもとに従属節で単純過去は相対時制として振る舞うことがあるとしているが (p.68)、これは疑わしい。

4. Declerck の時制理論

絶対時制と相対時制という区別は、時制が発話時現在 (to) だけではなく、他の出来事時 (ti) との相対的關係においても用いられることを示している。しかしこれでは 2 つの出来事時の比較に留まっていて、談話の観点から時制を考察すると言うには不十分である。Declerck の時制理論はさらに一步を進めて、談話の観点から時制を考察している。

(1) 時間の支配領域と時間的従属

複文や談話の流れの中においては、複数の異なった節の表す場面と場面の間に、時間の依存関係がみられる。こういう場合、時間の支配領域 (temporal domain) ということが問題になってくる。次の具体例を見てみよう。

Jim said that he was pleased that Bill had sent him a letter and that he would write a reply as soon as possible.

ジムはビルが手紙をくれて嬉しいと言い、そしてできるだけ早く返事を書くと言った。この例では、「時間の支配領域」、すなわち、過去時領域内にあって、描かれている四つの場面の時間から成る時間的範囲が問題とされている。この支配領域は、最上位の動詞の過去形 said によって定められている。(…)

ある場面が、もう一つ別の場面に先行するか、同時的であるか、後行するか、という観点からとらえられている場合、前者は後者に時間的に従属している (temporally subordinated to)、あるいは、時間的に束縛されている (temporally bound by) という。(…)

時間の支配領域を定める場面を、その支配領域の中心場面 (central situation) と呼ぶ。中心場面は、その支配領域内で、唯一、別の場面に時間的に従属していない場面である。
(デクラーク 1994 : 119)

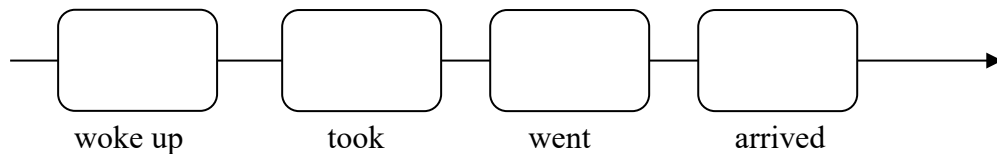
【考察】

Declerck の時制論の核心をなす概念が、中心場面 (central situation)、支配領域 (temporal domain)、時間的従属 (temporal subordination) である。この概念が組み込ま

れているために、Declerck の時制論は談話的たりえている。

語りで運動動詞の過去形が連続して表れるとき、中心場面は次々と移っていく。

- a. Bill woke up at 7. He *took* breakfast in a hurry and *went* out. He *arrived* at the office at 8. ビルは7時に起きた。彼は急いで朝食をとると出かけた。8時に会社に着いた。



はこの伝統的定義を踏襲しながらも、「時間の支配領域を定める時制（すなわち、その領域の中心場面を示す時制）」という定義を付け加えている。

Jim said that he was pleased that Bill had sent him a letter and that he would write a reply as soon as possible. ジムはビルが手紙をくれて嬉しいと言い、そしてできるだけ早く返事を書くと言った。

この例で中心場面を示すのは Jim said であり、これが絶対時制である。残りの he was pleased、Bill had sent、he would write は中心場面に従属する相対時制である。

(B) 上の例では過去時制 said は絶対時制で、同じ過去時制 was は相対時制とされている。つまり英語では過去時制が絶対時制としても相対時制としても振る舞うことになる。この点において、フランス語は英語と異なる。フランス語の複合過去と単純過去は常に絶対時制である。

(C) Declerck は英語の絶対時制は過去時制、現在完了、現在時制、未来時制の 4 つしかないことを明言しているが、相対時制がいくつあるかは言葉を濁している。

(3) 支配領域の転換 (shift of domain)

談話の流れの中においては、新しい節を導入する場合、その節が表す場面を、すでに定められている時間の支配領域に組み込むのか、あるいは、その節によって新しい時間の支配領域を定めるのか、話し手は、その都度、決めなければならない（後者の場合、支配領域の転換 (shift of domain) ということが問題となってくる）。次の例を見てみよう。

(1) a. I left while Bill was sleeping and Mary was having a bath.

私はビルが眠っていて、マリーが風呂に入っている間にその場を離れた。

b. Suddenly the phone rang. Jill stood up from her chair, went over to the telephone and picked up the receiver. 突然ベルが鳴った。ジルは椅子から立ち上がり、電話の方へ行き、受話器を取り上げた。

(1a)においては、三つの場面がすべて同時的である。すなわち、left は過去時領域を定める絶対時制であり、あとの二つの過去形は、それぞれの場面が中心場面と同時的であることを示す相対時制である。（このように、過去形は、絶対時制としても、相対時制としても用いることができる）こうして三つの場面は、同じ時間の支配領域に位置づけられることになる。(1b)では、いくつかの場面が時間的に連続して生じているが、時制によって場面相互の依存関係を示すことはしていない。具体的にいうと、話し手は、先行性を示す相対時制（すなわち、過去完了形）や後行性を示す相対時制（すなわち、条件時制）を用いることはせず、どの節にも絶対時制を用いている。したがって、新しい節ごとに支配領域が転換されている。（言い換えれば、節ごとに新しい支配領域が定められているのである）

(2) a. I knew Bill had been in Yugoslavia before. He had been there when he was still a child. 私はビルが以前ユーゴスラビアに行ったことを知っていた。彼はまだ子供

の頃にそこに行ったのだ。

- b. I *knew* Bill *had been* in Yugoslavia before. He *went* there when he was still a child.

私はビルが以前ユーゴスラビアに行ったことを知っていた。彼はまだ子供の頃にそこに行った。

(2a)においては、*had been* を含む二つの場面は、ともに *knew* が表す場面によって時間的に束縛されている。さらにいうなら、三つの節は、すべて同じ時間の支配領域に属している。これに対して、(2b)では、*went* が絶対時制であり、領域を転換している。
(デクラーク 1994 : 120)

(4) 過去時領域内で支配領域の転換が行われた場合（例えば、(2b)のような場合）、時制そのものは、二つの支配領域の時間的依存関係を示さない。そのため、過去時領域内で支配領域の転換が行われた場合には、時を表す副詞的修飾語句、叙述する順序、文脈、あるいは語用論的知識 (*pragmatic knowledge*)（すなわち、現実世界について我々がもっている一般的知識）などによって、場面相互の時間的順序関係がわかるようにしなければならない。

- (3) a. The soldier got seriously wounded. He *died* shortly afterwards.

兵士は深い傷を負った。彼はまもなく死亡した。

- b. The soldier got seriously wounded. He *would die* shortly afterwards.

兵士は深い傷を負った。彼はまもなく死亡することになる。

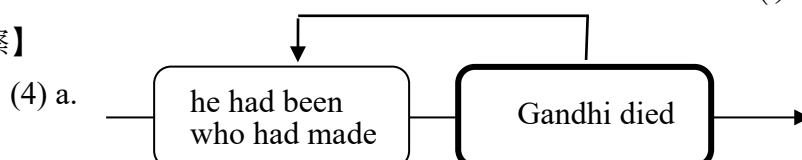
(3a) では、時間の支配領域が転換されているが、時の副詞的修飾語句 *shortly afterwards* によって、*died* の表す場面を前文が表す場面のあとに位置づけている。しかし、時制形式そのもの (*got wounded, died*) からは、一つ目の領域が最初の領域に後行するという情報は得られない。時制が与えている情報は、その二つの領域が過去時領域に属しているということだけである。(3b) では、二つの節が同じ領域に属している。あとの節が表している場面が前の節の表している場面の後行するという情報は、今度は、時の副詞的修飾語句 *shortly afterwards* と時制形式 *would die* によって与えられている。

- (4) a. In that year Gandhi *died*. He *had been* a popular hero, who *had made* an invaluable contribution to the creation of modern India. その年にガンジーは亡くなった。彼は国民的英雄であり、近代インドの建設に多大な貢献をしたのである。

- b. In that year Gandhi *died*. He *had been* a popular hero, who *made* an invaluable contribution to the creation of modern India. その年にガンジーは亡くなった。彼は国民的英雄であり、近代インドの建設に多大な貢献をした。

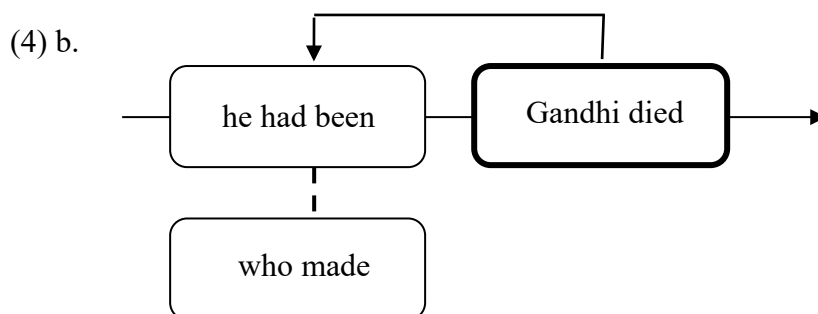
(デクラーク 1994 : 121)

【考察】





(4) a. では中心場面による時間的従属が二度起きている。**he had been** と **who had made** はそれぞれ独立に中心場面 **Gandhi died** に従属している。



(4) b. では、**he had been** が中心場面 **Gandhi died** にたいして従属しており、これは (4) a. と同じである。ところが **who made** は中心場面 **Gandhi died** にたいして従属しているのではない。**he had been** の場面との同時性を表わす相対時制だというのがデクラークの考えである。過去完了形は過去の過去を表すので、一見すると **he had been** が **who made** より過去に見えてしまうが、その解釈がまちがいであることに注意しよう。

(5) Declerck の時制理論における「中心場面」は、Langacker の認知言語学で「焦点フレーム」(focus frame)と呼ばれているものと同じである。

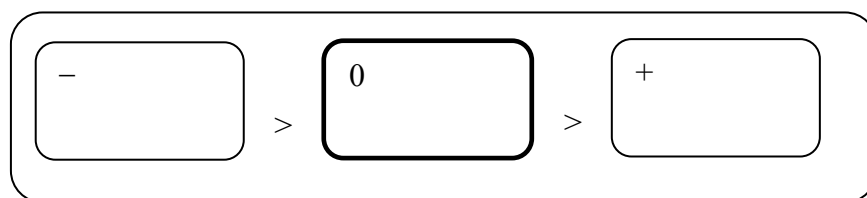


Figure 9

Following a suggestion by Harder (1996), we might think of linguistic structures (of whatever size) as *instructions* to modify the current discourse space in particular way. Each instruction comprises a succession of frames each representing the scene being “viewed” and acted on by the speaker and the hearer at a given instant. A sequence of frames in a discourse, each corresponding to one updating of the CDS, can be represented as in Figure 9. Heavy lines enclose the frame currently being acted on, which might be called the *focus frame*. (Langacker, R. W., “Discourse in Cognitive Grammar”, *Cognitive Linguistics* 12-1, 2001, p.151)

ハーダー (1996)の提案に従って、言語における構造は (いかなるサイズのものでも) 現行の談話スペース (CDS)をあるやり方で変更せよという「指令」と考えることができる。ひとつひとつの指令には一連のフレームが含まれており、フレームはある時点において話し

手と聞き手が「眺め」、また操作する場面を表している。談話における一連のフレームは、それぞれが現行の談話スペースをアップデートするもので、図 9 のように表すことができる。太線で囲まれているフレームは、今まさに操作されているフレームで、「焦点フレーム」と呼ぶことができる。

(6) As discourse unfolds, the expressions successively encountered serve to update the CDS. When attentional frame corresponds to clauses, major updating of the CDS proceeds on a clause-by-clause basis. (...) Whatever the level of organization, an instruction to update the CDS involves at least two discourse frames: a minus frame corresponding to the “input” CDS, i.e., the one to be updated, and the zero or focus frame, the one being created by the updating process. Even in degenerate cases, where the minus frame makes no significant specifications, it has at least an implicit schematic presence as the structure being operated on. (Langacker, *op. cit.*, p.163)

談話が進行するにつれて順番に会う表現は、現行の談話スペース (CDS) をアップデートする役割を果たす。注意が向けられているフレームが節のとき、現行の談話スペースのアップデートは節単位で進行する。(…) 組織化のレベルにかかわらず、現行の談話スペースをアップデートせよという指令には、少なくとも 2 つのフレームが含まれる。アップデートの対象となる「入力」に相当するマイナス・フレームと、アップデート操作によって作られるゼロ・フレーム、あるいは焦点フレームである。マイナス・フレームが特に何の指定も行わないような質の悪いケースでも、マイナス・フレームは操作の対象となる構造として、スキーマ的に隠れて存在すると考えるべきである。

(7) ここまで考察で、講義の最初に提示した問題(=1))に答えることができる。

問題：「彼はドアに鍵をかけると、外出した」をどう訳すか。

正解：Il a fermé la porte à clef et (il) est sorti.

疑問：「彼は外出した」は過去の出来事であり、複合過去で表されている。「彼はドアに鍵をかけた」はそれより前の出来事なので、大過去になるのではないか。

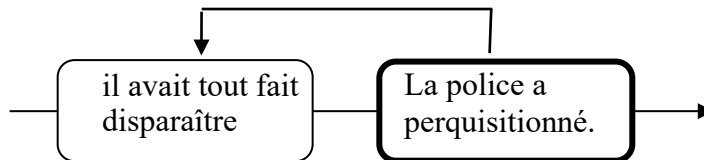
考察：学生の質問は馬鹿げた質問ではない。十分に意味のある質問であり、伝統的時制論がはっきりと触れてこなかった問題を指摘している。それは談話の進行にしたがって、Declerck の言う「中心場面」、Langacker の言う「焦点フレーム」が次々と切り替わってゆくという談話の「動的性質」である。課題の文ではまず「彼はドアに鍵をかけた」 Il a fermé la porte à clef が中心場面であり、目の前の画面に映写されている。次の文「(彼は) 外出した」 (il) est sorti の段階で中心場面はこちらに移っている。つまり画面は切り替わっている。「彼はドアに鍵をかけた」 Il a fermé la porte à clef は「(彼は) 外出した」 (il) est sorti よりも過去なので、大過去を使うべきなのではないかという考えはまちがっている。

(8) では大過去はどのような場合に用いるのだろうか。

a. La police a perquisitionné, il *avait tout fait* disparaître.

警察は家宅搜索をした。そのときまでに彼はすっかり証拠を隠滅してしまっていた。

(目黒士門『現代フランス広文典 改訂版』白水社、2015)



第 1 文 の La police a perquisitionné. が中心場面を設定する。第 2 文の il avait tout fait disparaître は中心場面を移動させない。中心場面から過去を振り返って述べている。いわゆるフラッシュバック用法である。大過去 il avait fait は「中心場面を移動させず、第 1 文が設定した中心場面を維持せよ」という指令として働く。

b. Tu as été content de revoir ta mère ? — Oui, j'*avais* longtemps attendu ce moment.

「お母さんに再会できてうれしかったでしょう」「はい、このときを長いあいだ待ち続けていました。」(Ibid.)

この大過去も同じで、第 1 文の Tu as été content de revoir ta mère ? が中心場面を設定し、第 2 文 Oui, j'*avais* longtemps attendu ce moment. では中心場面から過去を振り返っている。

(9) しかし文法書に載っているような典型的な用法ばかりではない。大過去にはもっと複雑な用法もある。

Laura, du journal, m'*avait téléphoné* à midi. J'*avais accepté* la mission, malgré les exigences odieuses et tyranniques du vieux négrier. En effet, je ne sortais plus des limites de ma ville, voire des limites de mon appartement, car je pouvais dans mes livres nombreux la matière de mes articles, et je me disais que la vie ne pouvait continuer ainsi. Mais **je n'*avais jamais fait*** de reportages sur le vif.

(R. Belleto, *L'Enfer* ; 鷺見洋一『翻訳仏文法 上』(日本翻訳家養成センター) から引用。同書は現在ちくま学芸文庫として刊行されている)

ローラが社から正午に電話してきた。仕事は引き受けたが、老奴隷商人ばりにあれこれ一方的に言ってくるのは忌々しい限りだ。たしかに、私は町を金輪際出ていない、というよりむしろじぶんのアパートマンを出ていない。つまり手許にある沢山の本を使って記事を書いていたわけで、こんなことがつづくはずはないと思ってはいた。だが、現地取材という奴はまだ一度もしたことがない。(鷺見訳、太字が大過去の部分)

(10) 主人公はある地方紙の記者で、町を離れた寒村で催される祭の取材にやってきたところなのである。引用部分には太字にした大過去形が三つと、他に半過去形が四箇所使われている。ところで、太字の大過去動詞は半過去形の動詞が表す行為

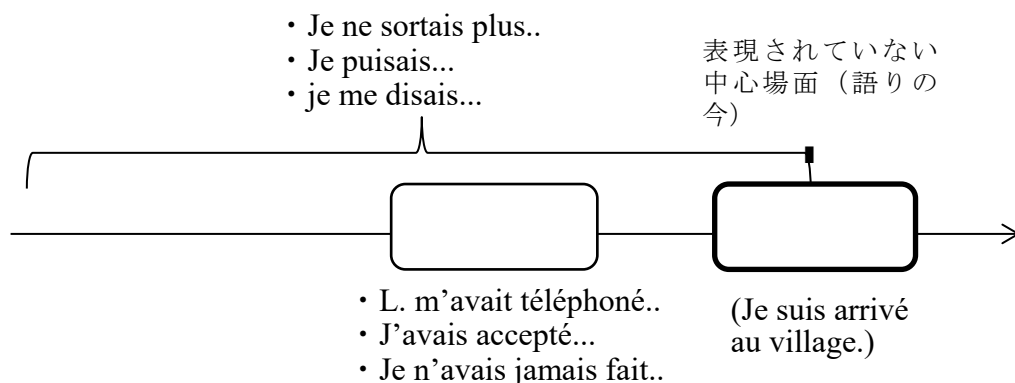
以前に完了したことを述べているのだろうか。ローラが電話をかけてきたのはその日の正午のことである。主人公は取材を承諾して村までやってきた。つまり時間的にごく近いことが大過去で語られており、そのすぐあとで「それまで私は町を出たことがない」というどちらかといえば遠い過去に属しそうな事柄が半過去で書かれているのである。この混乱は、むしろあくまで表面のものにすぎない。小説の時間、というよりは言語そのものが紡ぎ出す固有の時間を、現実の時間と同一視するところからくる混乱なのである。(…)

文例中の大過去と半過去の差は時計の時間差ではない。三つの大過去の箇所、この短編の語り手がくっきり浮かびあがらせているのは、おもしろいことに「私」という人物の物語における「現在」、つまり、とある村に到着直後の刻限である。この刻限は小説のなかでは過去という文法時制で示されるから、正午の電話は必然的に大過去で表されるにすぎない。読者がこの大過去のところで急に現実に戻されるような感じを抱くのは、もっぱらこの「現在」の浮き彫り効果のためである。一方、*je ne sortais plus...*てはじまる半過去の記述では、語り手はむしろ大過去部分に見られるような「現在」意識を捨てて、アパートマンに閉じこもっていたそれまでのじぶんの生活の方に意識をむけ、観念のなかではその時期に移行して書いている。小説の時制を決めているのは、かならずしも主人公がとある村で過ごしている夕刻から過去の方に無限にのびている目盛付きの時間軸ではなく、語り手がその都度えらびとるじぶんと物語の世界、過去の世界とのかかわりの「場」なのである。

(鷲見洋一、同書 pp. 286-287)

【考察】

引用した文章で述べられている出来事の時間的関係を、表現されていない語りの「現在」まで加えて表現すると次のようになると思われる。



【解説】

(A) テキスト上表現されていない「中心場面」は、当日の夕刻、村に着いた時点である (*Je suis arrivé au village.*)。テキストはその時点における主人公の想いとし

て書かれている。

- (B) 3つの大過去は中心場面から過去を振り返ったフラッシュバックである。
- (C) 4つの半過去は中心場面との同時性を表しているのではない。また3つの大過去との同時性を表しているわけでもない。中心場面より過去の領域でずっと成立しており、中心場面で成立しなくなった過去の事態を表す半過去である。
- (D) この例で特筆すべきは、本来ならば複合過去または単純過去で表されるべき「中心場面」すなわち「語りの今」が、時制として表現されていないにもかかわらず、それが**中心場面として引用箇所の時制の組織化を支配している**ということである。
- (E) 驚見も強調しているように、この例の大過去は「語りの現在」を浮き彫りにする効果がある。大過去が用いられている以上、その過去を振り返った時点があるはずで、それが「語りの現在」として働くのである。
- (11) Declerck の時制論で明らかにされたように、大過去はテキスト内に設定され次々と切り替わってゆく「中心場面」から見て過去方向へのフラッシュバックを表すのが主な用法である。しかし、同じ状況であっても大過去は常に用いられるわけではない。

【証言 1】

(大過去は) 主節の動詞と関係詞節の動詞の時間的前後関係を表す。

L'étiquette, que j'avais pourtant bien collée, est tombée.

ちゃんと貼っておいたのにラベルが落ちてしまった。

〔注〕同じような構文でも、二つの動詞がともに現在を基準としている場合には複合過去を用いる：*J'ai perdu le livre que tu m'as prêté ce matin.* けさ君が貸してくれた本が見当たらないのだ。

(目黒士門『現代フランス広文典 改訂版』白水社、2015、p.235)

【証言 2】

Notons toutefois une différence entre le fonctionnement du ps (=passé simple) et celui du pc (=passé composé) : le pc étant repéré par rapport à T_0 , un procès antérieur peut être exprimé au pqp (=plus-que-parfait) (« Il a mangé le gâteau qu'il avait acheté »), mais il peut être aussi bien exprimé au pc, donc repéré par rapport à T_0 et non pas par rapport au repère que représente le pc (« Il est parti hier. La veille il est allé voir sa grand-mère. »), et dans ce cas l'antériorité est marquée par un adverbe de temps (« la veille »), par une subordination (« avant de partir, il est allé voir sa grand-mère »), ou pas du tout (« il a mangé le gâteau qu'il a acheté »). Il semble beaucoup plus difficile que deux ps successifs puissent dénoter deux procès dont on aurait inversé l'ordre — celui qui a eu lieu d'abord exprimé en second. On a vu plus haut qu'une succession d'aoriste exprime la succession des procès (« il acheta un gâteau et le mangea »). Cela semble même à peu près impossible si la relation d'ordre

n'est pas marquée par un adverbe ou une subordination (*« il mangea le gâteau qu'il acheta »). Par contre une série de pc peut exprimer une série de procès tous repérés par rapport à T₀, mais sans relation d'ordre entre eux. De ce fait, on peut s'attendre à trouver plus de pqp dans les textes d'« histoire » que dans les textes de type « discours ».

(Simonin, J., “Les repétages énonciatifs dans les textes de presse”, A. Grésillon et J. L. Lebrave (eds) *La langue au ras du texte*, Presses Universitaires de Lille, 1984)

しかし単純過去と複合過去の働きのちがいに注意しよう。複合過去は発話時現在 (T₀)を基準として定位されるので、それより前の事行は大過去で表すことができるが (Il a mangé le gâteau qu'il avait acheté. 彼は買ったケーキを食べた)、複合過去で表すこともできる (Il est parti hier. La veille il est allé voir sa grand-mère. 彼は昨日発った。その前の日に彼は祖母に会いに行った) このとき事行は複合過去が表す基準点ではなく、発話時現在を基準として定位される。他の事行より前の事行であることは、時の副詞 (la veille 前の日) や従属 (avant de partir, il est allé voir sa grand-mère 発つ前に彼は祖母に会いに行った) で表すが、まったく表さないこともある (il a mangé le gâteau qu'il a acheté 彼は買ったケーキを食べた)。連続する単純過去が順序を入れ替えた事行 — 先に起きた事行が2番目に述べられている — を表すことははるかに難しいようだ。単純過去の連続はその順番に起きた事行を表すことはすでに見た (il acheta un gâteau et le mangea 彼はケーキを買って食べた)。もし時の副詞や従属によって出来事の順番が示されないと、これはほぼ不可能に見える (*il mangea le gâteau qu'il acheta 彼は買ったケーキを食べた【注】)。一方、複合過去の連続は、発話時現在を基準として定位され、かつお互いの順番は問わない一連の事行を表すことができる。このために、「歴史」のテキストには「談話」タイプのテキストよりも多くの大過去が使われることが予測できる。

【東郷注】 il mangea le gâteau qu'il acheta は「彼は買ったケーキを食べた」という意味では非文となる。「彼はケーキを食べ、それを買った」という意味は表すことができるが、それは世界の知識により排除される。cf. Nous attaquâmes l'ennemi qui se retira. 我々が敵を攻撃すると敵は退却した。

(12) 疑問

ふたつの出来事 E1 < E2 があるとき、E2 を複合過去で表したとして、先行する出来事 E1 は必ずしも大過去で表されるわけではない。E1 も複合過去で表すことがある。これはどういうことなのだろうか。出来事の時間的順序が時制の使い方を決定すると考えるとこれは説明できない。また Simonin は、「談話」タイプのテキストよりも「歴史」タイプのテキストの方に大過去が多く見られるとの予想を立てているが、どうしてそのようなことが言えるのだろうか。

5. ふたつの発話態度 (plan d'énonciation) : histoire と discours

Simonin が「歴史」(histoire)、「談話」(discours)と呼んでいるのは、Émile Benveniste, *Problèmes de linguistique générale* (Gallimard, 1966)所収の “Les relations de temps dans

le verbe français”で提唱されている概念である。(河村正夫他訳『一般言語学の諸問題』みすず書房、1983、「フランス語動詞における時称の関係」)

(1) Les temps d'un verbe français ne s'emploient pas comme les membres d'un système unique, ils se distribuent en *deux systèmes* distincts et complémentaires. Chacun d'eux ne comprend qu'une partie des temps du verbe ; tous les deux sont en usage concurrent et demeurent disponibles pour chaque locuteur. Ces deux systèmes manifestent deux plans d'énonciation différents, que nous distinguerons comme celui de l'*histoire* et celui du *discours*.

L'énonciation *historique*, aujourd'hui réservé à la langue écrite, caractérise le récit des événements passés. Ces trois termes, « récit », « événement », « passé », sont également à souligner. Il s'agit de la présentation des faits survenus à un certain moment du temps, sans aucune intervention du locuteur dans le récit. (...) Le plan historique de l'énonciation se reconnaît à ce qu'il impose une délimitation particulière aux deux catégories verbales du temps et de la personne prises ensemble. Nous définirons le récit historique comme le mode d'énonciation qui exclut toute forme linguistique « autobiographiques ». (...) On ne constatera donc dans le récit historique strictement poursuivi que des formes de « 3^e personne ». (...) A vrai dire, il n'y a même plus alors de narrateur. Les événements sont posés comme ils se sont produits à mesure qu'ils apparaissent à l'horizon de l'histoire. Personne ne parle ici ; les événements semblent se raconter eux-mêmes. Le temps fondamental est l'aoriste, qui est le temps de l'événement hors de la personne d'un narrateur.

Nous avons, par contraste, situé d'avance le plan du *discours*. Il faut entendre discours dans sa plus grande extension : toute énonciation supposant un locuteur et un auditeur, et chez le premier l'intention d'influencer l'autre en quelque manière.

(Benveniste, *op. cit.*, pp. 238-242)

フランス語の一つの動詞の時称は、ただ一つの体系の成員として用いられるのではなく、それは互いに異なり、しかも相補的な二つの体系に配分されている。両体系はそれぞれその動詞の時称の一部を包含するにすぎず、競合的に用いられていて、話し手は各自、いずれを用いることも自由である。この二つの体系は、言表行為の相異なる二つの面 **plan** を明示しているのである。筆者はこれを、歴史の面と話(わ) **discours** の面として区別しよう。

歴史の方の言表行為は、今日では書く言語にしか用いられないが、過去の出来事を物語るのがその特性である。この三つの用語、《物語》と《出来事》と《過去》とは、平等に強調されねばならない。これは、物語のなかに話し手が全く介入することなく、ある時点に生じた事実を提示するものである。(…)

言表行為の歴史の面がそれと認められるのは、動詞の時称と人称の二つの範疇を同時にとらえて、それに特殊な限定を加えていることによる。われわれは歴史叙述を、あらゆる《自叙伝》の言語形を排除する言表様式と定義しよう。(…) したがって、厳密に一貫して続けられる歴史叙述のなかでは、ただ《三人称》の形しか認められないであろう。(…) 実際、もはやこのときは語り手さえ存在していない。出来事は、それが歴史の視界に現れる

につれて生じたものとして提示される。ここにはだれ一人話すものはいないのであって、出来事自身がみずから物語るかのようである。

われわれは、対比のために、話（わ）の面をあらかじめ位置づけた。ところで話（わ）というものは、そのもっとも広い意味において、すなわち話し手と聞き手とを想定し、しかも前者においてなんらかの仕方で後者に影響を与えようとする意図のあるあらゆる言表行為として理解される必要がある。

（E. バンヴェニスト著、河村正夫他訳『一般言語学の諸問題』みすず書房、1983「フランス語動詞における時称の関係」）

(2) 例示

a. 典型的な *histoire*

「昔々ある所に、お爺さんとお婆さんが住んでおりました。お爺さんは山へ柴刈りに、お婆さんは川へ洗濯に行きました。お婆さんが洗濯をしていると、川上から大きな桃がどんぶらこどんぶらこと流れてきました。」

時制は過去が基本で、人称は3人称、発話時現在 (t_0) は一時的に消去され、話し手の「私」や「ここ」や「今日」のように話し手を原点とする直示表現は用いられない。発話の場に依存しないで意味が理解できるので、「過去の出来事を現在と切り離して客観的に述べる」（目黒 2015）と言われることがある。

b. 典型的な *discours*

「君、ちょっとこちらに来て、私の仕事を手伝ってくれないか」

話し手「私」、聞き手「君」、直示表現「こちら」、「くれないか」が示す依頼という相手に働きかける意図などを含み、意味解釈に当たっては話し手・聞き手を軸とする発話の場に強く依存する。疑問、依頼、命令、教唆など、聞き手に対するモダリティ的働きかけを含む文はすべて *discours* である。

(3) *histoire* / *discours* と時制の分布

Benveniste はフランス語の時制の分布を次のように考えていた。

a. *histoire* で用いることのできる時制

単純過去（および前過去）、半過去、大過去、過去未来の条件法、過去未来の *devoir*。現在と複合過去は厳密に排除される。

b. *discours* で用いることのできる時制

単純過去（および前過去）を除くあらゆる時制が用いられる。

(4) *histoire* の例

Poussin *regardait* alternativement le vieillard et Porbus avec une inquiète curiosité. Il *s'approcha* de celui-ci comme pour lui demander le nom de leur hôte ; le peintre *se mit* un doigt sur les lèvres d'un air de mystère, et le jeune homme, vivement intéressé, *garda* le silence, espérant que tôt ou tard quelque mot lui *permettrait* de deviner le nom de son hôte, dont la richesse et les talents *étaient* suffisamment attestés par le respect que Porbus lui

témoignait, et par les merveilles entassées dans cette salle.

(H. de Balzac, *Le chef-d'œuvre inconnu*)

プッサンは心配しながらも知りたい気持ちを抑えがたく、老人とポルビュスを代わる代わる眺めていた。彼はポルビュスに近づいてこの家の主の名前をたずねようとした。するとポルビュスは秘密めかして口に指を当てた。若者はいたく興味をそそられたが、黙っていた。いずれ言葉の端々からこの家の主の名が知れるだろうと考えてのことである。主が金持ちで才能に溢れていることは、ポルビュスが主に敬意を払っていることと、この部屋に山と積まれた豪華な品々から明らかだった。

【使われている時制】

- a. 単純過去 : *il s'approcha / le peintre se mit / le jeune homme (...) garda le silence*
- b. 半過去 : *Poussin regardait / la richesse et les talents étaient / Porbus lui témoignait*
- c. 過去未来の条件法 : *quelque mot lui permettrait de deviner*

(5) discours の例

Quand je suis entré dans la cour de l'école, ce matin, Geoffroy est venu vers moi, l'air tout embêté. Il m'a dit qu'il avait entendu les grands dire que des docteurs allaient venir pour nous faire des radios. Et puis les autres copains sont arrivés. (...) On était tous très embêtés, sauf Alceste qui rigolait et Agnan qui n'avait rien entendu parce qu'il repassait ses leçons.

(Sempé / Goscinny, *Le petit Nicolas et les copains*)

僕が今朝校庭に入って行くと、ジョフロワがとても心配そうな様子で僕に近づいて来た。奴の話では、お医者さんが僕たちのレントゲンを撮りに学校に来ると大人が話していたのを聞いたらしい。その時他の友達がやって来た。(…) ふざけていたアルセストと、課題のおさらいをされていて何も聞いていなかったアニャンは別だけど、他のみんなはとても心配になった。

【使われている時制】

- a. 複合過去 : *je suis entré / Geoffroy est venu / il m'a dit / les autres copains sont arrivés*
- b. 半過去 : *on était tous très embêtés / Alceste qui rigolait / il repassait*
- c. 大過去 : *il avait entendu / qui n'avait rien entendu*
- d. 近接未来の過去形 : *des docteurs allaient venir*

(5) Benveniste 説への疑問

Benveniste は *histoire* を「あらゆる自叙伝的要素を排除する」発話態度と定義しているため、話し手 (je) と発話時現在 (to) と強い結びつきを持つ現在形は *histoire* では用いられない (ただし普遍的真理を述べる現在形は例外)。過去領域に限定すると、*histoire* では単純過去が基本時制で、discours では複合過去が基本時制とされる。単純過去 vs. 複合過去の対立が *histoire* と discours をもっともよく特徴づけるものとなっている。しかし同じ過去領域でも、半過去と大過去は *histoire* / discours どちら

でも用いられるとされる。これは整合性を欠くのではないか。histoire / discours の区別は発話態度のちがいのだから、半過去と大過去も **histoire** で使われたときと **discours** で使われたときとは、その働きが異なるのではないだろうか。

6. 二つの発話態度 **histoire / discours** と絶対時制・相対時制

(1) 語り (narrative) のテキストにおける時制の機能

The feature that most clearly distinguishes narratives from other types of expository texts, however, is that they aim to narrate or tell a story. Indeed, if it lacks this dimension, a text will cease to be a narrative. The notion of narrating is typically associated with the setting out of events in a particular temporal order. (...)

In the case of the narrative texts, there is no clear relationship between the referential domain of the text and that of the utterance event. (...) Because of this cutting of the link between the text and the coordinates of its production, the narrative texts do not have a deictic center that links the text to its actual utterance event. Caenepeel and Sandströme (1992) refer to this as the *bracketing of the speech point*.

The most salient consequence of the bracketing of the speech point is that actual deictic time reference is no longer possible, since the states of affairs described in the text and the actual speech time cannot be placed on the same temporal continuum (the actual time line). The loss of this potential for deictic temporal reference is compensated for by the construction of a narrative time line, that is, an imaginary time line that derives its existence solely from the text and that bears no direct relation to the actual time line. (...)

The bracketing of the speech time and the construction of a narrative time line have important repercussions for the function of tense in narrative texts. In temporal semantic account a tensed sentence is typically assumed to be interpreted at an index that represents its speech time. In the light of what I have said about the bracketing of the speech time in narrative texts, however, the actual speech point cannot in such cases be involved in the evaluation and temporal interpretation of tensed sentences. In the absence of an index for speech time, tense will lose the deictic capacity it exhibits in other discourse types and, instead, take on a role that is often referred to as anaphoric. (...) the temporal location of events with respect to each other on the narrative time line becomes the focus for their temporal interpretation.

(Caenepeel, M., “Aspect and text structure”, *Linguistics* 33, 1995, 213-253)

しかしながら語りと他のタイプのテキストの最も大きなちがいは、語りは物語を語ることがを目的としている点にある。実際、もしこの目的を持たなければもはや語りとは言えなくなる。語りの概念と典型的に結びついているのは、ある時間的順序に沿った出来事の提示である。(…)

語りのテキストでは、テキストの指示領域と発話行為のあいだに明確なつながりは存在しない。(…) テキストとそれを生み出した座標のあいだのつながりが切断されているために、語りのテキストの中にはテキストと発話行為を結びつける直示の中心は存在しない。ケネピール & サンドストローム (1992)ではこのことを「発話時点をカッコに入れる」と

表現した。

「発話時点をカッコに入れる」ことのもっとも重要な帰結は、現実には流れている直示的時間に言及することができなくなることである。語りのテキストで描かれている事態と現実の発話の時間を、同じ時間軸 (=現実の時間軸) に置くことができないためである。こうして直示的な時間指示の働きは失われるが、その代償として語りにおいては「語りの時間軸」が構築される。「語りの時間軸」は想像上の時間軸であり、その存在はテキストだけが支えていて、現実の時間軸とは直接の関係を持たない。(…)

「発話時点をカッコに入れる」こととそれと関連する語りの時間軸の構築は、語りのテキストにおける時制の働きに大きな影響を及ぼす。時間の意味論による説明では、時制を持つ文は発話時点を表す指標を基準点として解釈されるのがふつうである。しかし語りにおいて発話時点はカッコに入れられるので、語りのテキストに現れる時制を持つ文の解釈と評価においては、発話時点を基準とすることができないのは明らかである。発話時点を表す指標がないために、時制は他のタイプのテキストで持っている直示的機能を失い、その代わりにしばしば照応的と呼ばれる能力を獲得する。(…) 語りの時間軸上で出来事の起きる順序が、出来事の時間的解釈のもっとも重要なポイントとなるのである。

(2) 解説と考察

通常の言語使用においては直示中心 (deictic center) が意味解釈の原点となる

a. [学生食堂で]

Tu manges souvent ici ? 君はよくここで食事するの？

— Oui, assez souvent. J'ai mangé ici hier. うん、まあよく。昨日もここで食べた。

この例では 1 人称「私」(je)、2 人称「君」(tu) という人称を軸に、場所副詞の *ici*、時間副詞の *hier* が、話し手の *moi-ici-maintenant* を原点として使われている。またこの発話は疑問と答というモダリティを持ち、話し手と聞き手の相互行為という性格が強く出ている。複合過去 *J'ai mangé* は発話時点 (t_0) を原点とする絶対時制であり、「話している今から見て過去」を表す。

Caenepeel が主張しているのは、「語り」(英 *narrative*, 仏 *récit*) はこのような通常の言語使用とはまったく異なる性格を持つということである。その原因は語りにおいては**発話時点がカッコにいれられる** (bracketing of the speech point) ことにある。

現実のことでも虚構でも、語りには発話主体としての話し手はいない。発話時点もない。語りを行うのは「語り手」(*raconteur / conteur*)であって話し手 (*sujet parlant / locuteur*)ではない。

b. Il était une fois un bûcheron et une bûcheronne qui avaient sept enfants ; tous des garçons. Le plus jeune était si petit quand il vint au monde qu'on l'appela le Petit Poucet.

(Charles Perrault, *Le Petit Poucet*)

昔々あるところに、7 人の子供がいる木こりとその妻がおりました。7 人の子供はぜんぶ男の子でした。いちばん年下の子は生まれてきたときとても小さかったので、

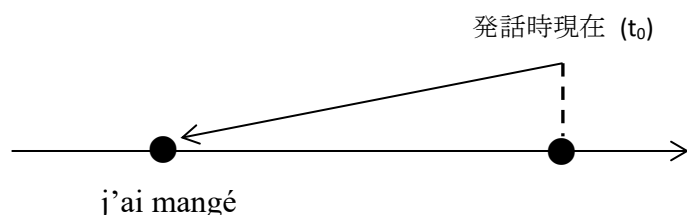
親指小僧と名付けられました。

上の例の半過去 *il était une fois* や単純過去 *on l'appela* は発話時点から見た過去を表すのではない。語りのテキストには直示中心 (deictic center) はないからである。

(3) discours における出来事の定位

discours タイプのテキストでは出来事は *moi-ici-maintenant* の直示中心を原点として定位される。時制に限って言えば、絶対時制で述べられた出来事は発話時現在 (t_0) を原点として定位される。

a. *J'ai mangé ici hier.* 私は昨日ここで食事した。



一方、discours における相対時制は、絶対時制で述べられた出来事を基準点とするため、二重の定位を受けることになる。

b. Blanche : *Qui c'était, ce garçon ?*

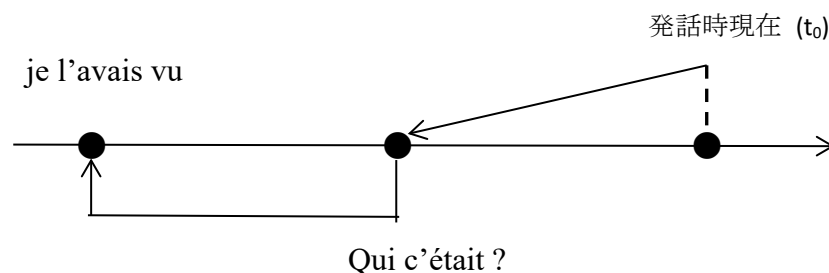
Léa : *Un vague copain de Fabien. Il est ingénieur à E.D.F. Alexandre, le bel Alexandre.*

Blanche : *Je l'avais déjà vu en ville.*

B : あの人誰だったの。

L : ファビ안의知り合いよ。フランス電力公社で技師をしているの。アレクサンドル、ハンサムなアレクサンドル。

B : あの人、前に町で見かけたことがあるわ。



したがって、discours においては絶対時制・相対時制の区別は十分に意味を持つ。

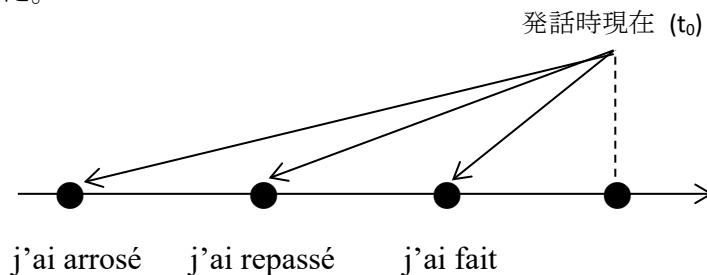
(4) histoire (narrative) における出来事の定位

Caenepeel が主張するように、語り (histoire / narrative) においては「発話時点がカッコに入れられる」とすれば、語りにおいては絶対時制は存在しない。すべては相

対時制となる。したがってふつう絶対時制と見なされる単純過去（およびその代替形式としての複合過去）も、語りのテキストでは相対時制である。

(5) discours で複合過去を用いて述べられた出来事の定位操作

Aujourd'hui, j'ai arrosé les plantes, j'ai repassé les draps et j'ai fait une quiche lorraine. 今日、私は植物に水をやり、シーツにアイロンをかけ、キッシュ・ロレーヌを作りました。



三つの複合過去が表す出来事は、そのたびごとに発話時現在 (t_0) を基点として時間軸上に定位される。出来事の相対的順序は複合過去では表現されない。したがって現実に行なった順番は、「アイロンかけ」「キッシュ作り」「水やり」でも、「キッシュ作り」「アイロンかけ」「水やり」でもよい。出来事を起きた順番に提示することが求められる「語り」(récit) に複合過去が向かないのはこのためである。

複合過去で書かれた最初の小説 A. Camus, *L'Étranger* では、この難点を克服するために、ensuite, et puis, à ce moment-là, plus tard などの時の副詞が多用されている。

- *À ce moment*, le concierge est entré derrière mon dos.

このとき私の背後から管理人が入ってきた。

- *Peu après*, une des femmes s'est mise à pleurer. ほどなく女性の一人が泣き出した。

- *Puis* j'ai encore dormi. Je me suis réveillé parce que j'avais de plus en plus mal aux reins. そして私はまた眠った。私は間もなく目を覚ましたが、それはますます腰が痛くなったからだ。

(6) discours における大過去

discours では大過去の使用は義務的ではない。大過去は *langue soutenue* に属する。特に関係節では従属節が主節の支配を受けないので、大過去も複合過去も使える。

- Il a mangé le gâteau qu'il avait acheté. 彼は買ったケーキを食べた。
- Il a mangé le gâteau qu'il a acheté.
- J'allais lui en (=poupée) donner une, beaucoup moins belle, que j'ai achetée hier après-midi aux Galeries. Je la tenais derrière mon dos quand nous sommes entrées dans la chambre. (G. Simenon, *Un Noël de Maigret*)

私はあの子に人形をあげようとしていたところです。そこにあるのほど立派なものではありませんが。昨日の午後にギャラリー（ラファイエット）で買いました。私たちが部屋に入ったとき、私はその人形を背中に隠して持っていました。

例 c. では人形を買ったのは半過去 *J'allais lui donner une / Je la tenais* が表す過去時点より前のことなので、大過去を使うべきところだが、*hier après-midi* という発話時現在を基点とする副詞を用いているため、大過去が使えず複合過去を用いている。

(7) *histoire* における大過去

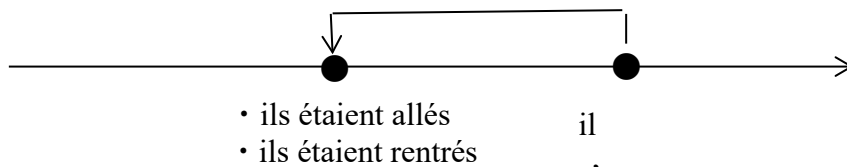
En regardant sa montre sur la table de nuit, il s'aperçut qu'il n'était que huit heures dix. Ils *étaient allés* au théâtre, la veille au soir. [芝居の後でレストランで食事しようとしたが、どこも満員で入れずそのまま帰宅した] De sorte qu'il était un tout petit peu moins de minuit quand ils *étaient rentrés*, et ils n'avaient guère à attendre pour se donner les cadeaux.

(G. Simenon, *Un Noël de Maigret*)

ナイトテーブルに置いてある腕時計を見て、メグレはまだ 8 時 10 分であることに気づいた。二人は前の晩、芝居を見に行っていた。(…) そんなわけで、二人が帰宅したときは夜中の 12 時の少し前だった。クリスマス・プレゼントを交換するのにそれほど待つ必要はなかった。

【考察】

discours とは異なり *histoire* では発話時現在 (t_0) がないので、大過去で表された出来事は *discours* のように二重の定位を受けない。他の時制が表す出来事や時の副詞が表す時点にたいして「それより前」の定位を受けるだけである。



(8) まとめ

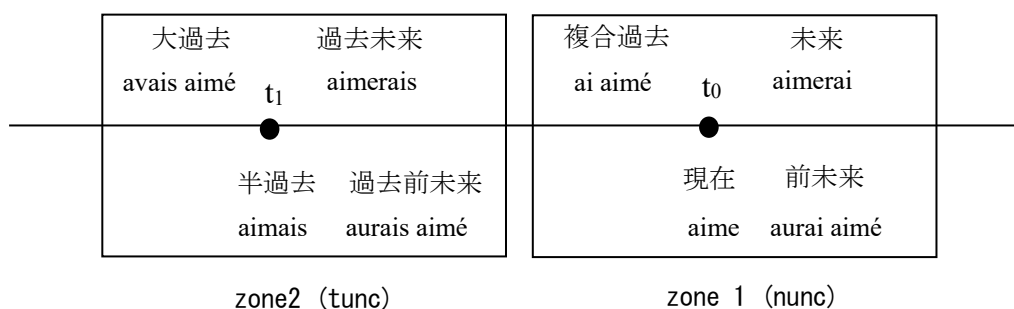
語りのテキストには発話時現在 (t_0)がないことを認めるならば、絶対時制・相対時制の区別が意味を持つのは *discours* においてだけということになる。絶対時制は発話時現在を基準とする直示的時制なので、語りのテキストには存在しない。語りでは時制はすべて相対時制である。

(9) 疑問

単純過去は *histoire* でしか用いられないし、複合過去は *discours* でしか用いられない。単純過去と複合過去はそれぞれの発話態度をよく表して二項対立する。しかし半過去と大過去は *histoire* / *discours* どちらにも用いられる。第 5 章の最後で述べたように、半過去と大過去は *histoire* と *discours* で同じ働きをするのだろうか。

7. フランス語の時制体系 — ふたつのゾーン

(1) フランス語の時制の全体像



この図式には次のような主張が含まれている。

- (A) zone 1 (noncal)は発話時現在 (t_0)を中心とする時制である。 t_0 に視点を置いて、その時点で展開中の事態は現在形で表され、過去を振り返ると複合過去形、未来を見ると単純未来形と前未来形を用いる。
- (B) zone 2 (toncal)は過去のある時点 t_1 を中心とする時制である。 t_1 に視点を置いて、その時点で展開中の事態は半過去形で表され、過去を振り返ると大過去形、未来を見ると過去未来形（条件法現在）と過去前未来形（条件法過去）を用いる。
- (C) 時間を区分するとき過去・現在・未来の3分法がふつうである。しかしフランス語の時制に関するかぎり、未来は独立の領域を作らない。未来とは現在から見た予測にすぎず、現在に従属している。
- (D) 話し手が視点を置くことができるのは、現在形で表された事態と半過去形で表された事態に限られる。それは現在形と半過去形だけが未完了の時制だからである。その他の時制で表された事態は「基準点」にはなりえても、視点を置くことはできない。
- (E) zone 1 を切り取って過去方向に移動すると zone 2 が得られる。つまり zone 2 は zone 1 を過去の領域に投影したものである。
- (F) 単純過去と前過去は上の図式に位置づけることができない。上の図式に配置された時制は発話時現在 (t_0)を原点とするものであるが、単純過去・前過去は発話時を持たないからである。
- (G) zone 1 と zone 2 は「断絶」している。「断絶」と話し手・聞き手が認知的に直接アクセスすることができない別の世界を構成しているということである。

【参考文献】

東郷雄二「Je t'attendais.型半過去再考」、『フランス語学研究』41号、16-30、2007。

東郷雄二「半過去の照応的性格 – 連想照応と不完全定名詞句の意味解釈から」、『フランス語学研究』42 号、17-30、2008.

東郷雄二「談話情報管理から見た時制 – 単純過去と半過去」、『フランス語学研究』44 号、15-32、2010.

東郷雄二「時制と談話構造 – 同時性を表さない半過去再考」、『フランス語学研究』46 号、51-67、2012.

東郷雄二「半過去の叙想的テンス用法」、春木仁孝・東郷雄二編『フランス語学の最前線 2 – 特集「時制」』、ひつじ書房、45-87、2014.

(2) 半過去は現実とは別の *actualité* に属する

Le second taxième touchant l'idée de temps est le taxième d'**actualité**, qui oppose les tiroirs **noncaux** *je fais, je ferai, j'ai fait, j'aurai fait* aux tiroirs **toncaux** *je faisais, je ferais, j'avais fait, j'aurais fait*. Pour comprendre le rôle de la seconde série de tiroirs par rapport à la première, il importe essentiellement de constater que l'expression du passé n'est qu'un des cas particuliers de la signification de cette série de tiroirs.

(Damourette, J. & E. Pichon, *Des mots à la pensée. Essai de grammaire de la langue française*, D'Artrey, 1911-1936, Tome 5, §1703)

時の概念に関わる 2 つめの中核要素は「現実性」(*actualité*) である。これによって現実領域の時制 *je fais* (現在形)、*je ferai* (単純未来形)、*j'ai fait* (複合過去形)、*j'aurai fait* (前未来形) と、非・現実領域の時制 *je faisais* (半過去形)、*je ferais* (過去未来形)、*j'avais fait* (大過去形)、*j'aurais fait* (過去前未来形) が対立する。一つ目の時制群と比較しての二つ目の時制群の役割を理解するためには、二つ目の時制群にとって過去を表すことはこれらの時制が持っている意味の一つの特殊なケースにすぎないということを確認することが肝要である。

(3) Ce qu'il faut retenir, parce que cela va être le caractère commun à tous les emplois du toncal pur, c'est que ce tiroir marque ici le placement du fait verbal dans une autre sphère d'action, une autre *actualité*, que celle où se trouve le locuteur au moment de la parole. La position naturelle et fondamentale de l'esprit, c'est de centrer le monde des phénomènes sur le locuteur se concevant lui-même dans l'instant présent : le « moi-ici-maintenant ». Ce mode d'aperceance des phénomènes constitue l'*actualité* noncale. Toutes les fois, au contraire, que l'esprit fait l'effort de se reporter dans un monde phénoménal autrement centré, on est dans une *actualité* toncale, et il apparaît dans la phrase soit le *saviez*, soit, selon les nuances nécessaires, le tiroir toncal complexe appropriés.

(Damourette & Pichon, *op. cit.*, Tome 5, §1709)

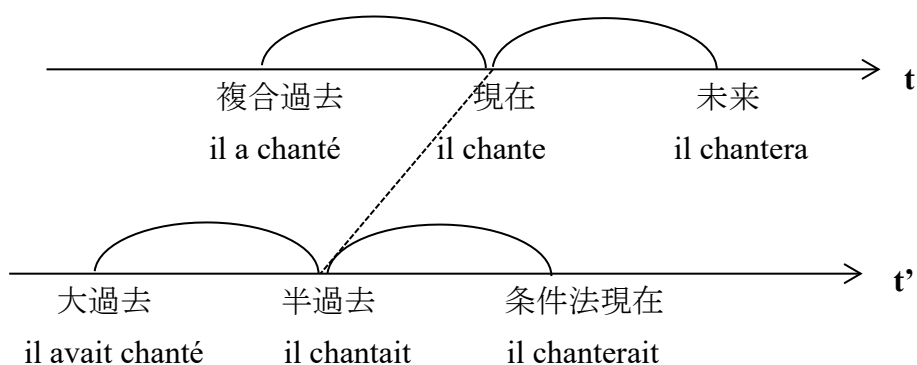
次のことは過去領域を代表する時制 (=半過去形) のすべての用法に共通するものであるため特に留意する必要がある。半過去形は、話し手が発話するときに位置している世界と

は異なる行動圏、異なる現実に来事を書くということである。私たちが物事を考えるとき、最も自然で普通なのは話している現在の状態、すなわち「私・ここ・今」を物事を中心に据えることである。このような出来事の把握が現実領域を構成する。逆に私たちが物事を現在とは違った世界において考えようとするとき、非・現実領域が姿を現す。このとき文の中には半過去形か、もしくは様々なニュアンスを伴って非・現実領域の複合的な時制が現れるのである。

(4) Co Vet, “L'imparfait : emploi anaphorique et emplois non anaphoriques”, E. Labeau et al. (eds) *Nouveaux développements de l'imparfait*, (Cahiers Chronos 14), Rodopi.

(système I) présent		
Antériorité R	Simultanéité S	Postériorité R
<i>PS / PC</i> PA / PSC	<i>PR</i> PC	<i>FUT</i> FA
(système II) passé		
Antériorité R	Simultanéité S'	Postériorité R
<i>PQP</i> PQPS	<i>IMP</i> PQP	<i>FUTP</i> FAP

(5) 春木仁孝他『新・フランス語文法』三訂版、朝日出版社、2017
§76 基本時制の相互関係 (p. 102)



8. discours の半過去と histoire の半過去

Benveniste は *histoire* では単純過去、*discours* では複合過去を用いるとしたが、半

過去と大過去は両方で用いられると指摘するに留まり、それ以上の考察を行なっていない。しかし *histoire* / *discours* は発話態度のちがいである以上、半過去と大過去も両方で同じ意味価値を持つとは思えない。実際に *discours* の半過去と *histoire* の半過去は異なる働きをする。

(1) *histoire* の半過去

「基準点との同時性を表す」半過去として、教科書や文法書でも説明されている。

a. 過去の基準点を持つ分割相

Quand j'entrai, Pierre lisait. 入って行くと、ピエールは読書中だった。

(佐藤房吉他『詳解フランス文典』駿河台出版社、1991)

a. 過去の特定の時点での状況

文脈などで示される過去の特定の時点での状況を描きます。

Lise dormait profondément quand le train est arrivé à Nice.

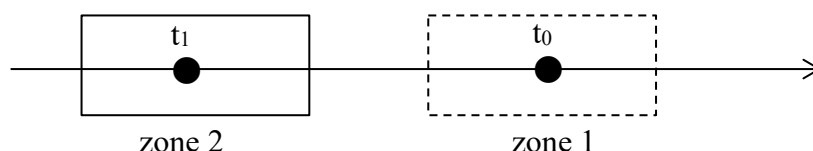
列車がニースに着いたとき、リーズはすっかり眠り込んでいた。

(六鹿豊『これならわかるフランス語文法』NHK 出版、2016)

(2) 二つの zone 説による説明

同時性を表す半過去は「語り」に現れる *histoire* の半過去である。*histoire* の発話態度では発話時現在 (t_0)は一時的にカッコに入れられるため、zone 1 は背景化し zone 2 のみが発動する。図の点線は背景化していることを表す。

Quand j'entrai, Pierre lisait. 入って行くと、ピエールは読書中だった。



単純過去 *j'entrai* によって、過去の時点 t_1 が時間軸上に設定される。 t_1 を中心とする zone 2 が形成される。半過去 *Pierre lisait* は t_1 を基準点とし、その時点において展開中であった未完了の事態を表す。発話時現在 (t_0)が働いていないので、***histoire* の半過去は相対時制だ**と考えなくてはならない。

(3) 一方、*discours* の半過去については、明確に項を立てて説明しているものはほとんどない。散発的な記述があるに留まる。

a. 現在の事態に関わる半過去 : *discours* の半過去

会話で用いられ、談話のレベルに属す。話者あるいは話し相手が意識していなかった、発言時の直前までの状態を示す用法である。近年の呼び方では「談話の半過去」(Le Gern)などとされている。

Qu'est-ce que vous faites ? — Ah ! Vous étiez là.

「何をしているのですか」「おや、いらしたですね」

On vous *attendait*. [遅れて来た人に] 待ってたんですよ。

(佐藤房吉他『詳解フランス文典』駿河台出版社、1991)

cf. Le Guern, M., “Notes sur le verbe français”, S. Rémi-Giraud et al. (eds) *Sur le verb*, Presses Universitaires de Lyon, 1986)

- b. 朝倉季雄『新フランス文法事典』(白水社、2002) の *imparfait* の項に「5⁰ 未完了 (*inachèvement*)」を表す用法の派生的用法が挙げられている。

① 試みて実現できなかった行為

Les pleurs qu’il *retenait* coulèrent un moment.

こらえんとすれど、一瞬涙が流れた。

② 企てた行為の中断

Tiens ! Tu es encore ici ! — Je *sortais*.

「おや、お前まだいたのか」「出かけようとしたところです」

③ 継続行為の中断

Ah ! J’*oubliais* de vous présenter ma secrétaire.

秘書を紹介するのを忘れていました (今、思い出した)。

このうち②と③が *discours* の半過去だと考えられる。

- (4) 西村牧夫「現在に関わる大過去」、東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語学の諸問題』三修社、1985.

a. Je *travaille*. 勉強しているんだ。 → だから邪魔するな。

b. Je *travailleais*. 勉強していたんだ。 → でも他のことをしてもいい。

c. Nous *nous entendions bien*.

僕たちせっかく気が合っていたのに。 →なのに別れなくてはならない。

d. Je *m’en doutais*. そうだとおもっていたよ。 → 確かにそうだった。

「半過去形は発話の現在を基準点として『不連続』を表す。アスペクト的には『線』を、時間的には『発話時より前』により特徴づけられる」

- (5) *discours* の半過去の他の例

a. Comment il *s’appelait déjà* ? あの人の名前、何だっけ。

b. J’*oubliais*. Demain, c’*était* l’anniversaire de ma fille.

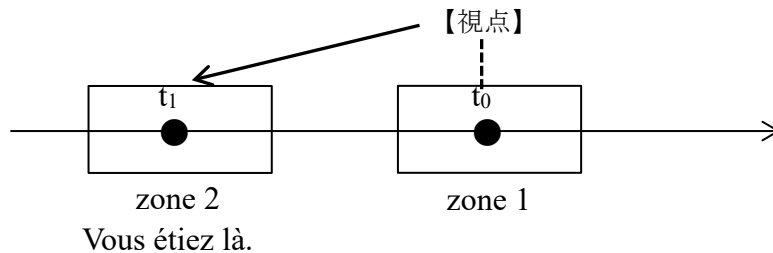
忘れるところだった。明日は娘の誕生日だった。

c. Ton avion *partait* à 16h30 ?

君が乗る飛行機は 16 時 30 分発だったね。

- (6) 二つの *zone* 説による *discours* の半過去の説明

Ah ! Vous *étiez* là. ああ、そこにいらしたのですか。



histoire の半過去と異なり、*discours* の半過去においては発話時現在 (t_0) が働いている。これにより zone 1 と zone 2 の両方が発動される。話し手は発話時現在 (t_0) に視点を置いて事態を述べる。話し手の視点は発話時現在から離れることができない (*discours* の視点制約)。話し手の視点移動が可能なのは *histoire* だけである。

zone 1 と zone 2 は「断絶」している。zone 2 は「あなたがそこにいることに気づいていなかった過去」を、zone 1 は「あなたがそこにいることに気づいた今」を表している。この用法はしばしば「失念・再確認の半過去」とか「現在との対比を表す半過去」と呼ばれることがあるが、それは二つの zone が「断絶」しているからである。*discours* の半過去には発話時現在 (t_0) が働き、現在と相対的に出来事が定位されるのだから、***discours* の半過去は絶対時制と考えなくてはならない。**

9. *discours* の大過去と *histoire* の大過去

半過去に *histoire* の半過去と *discours* の半過去があるように、大過去にも *histoire* の大過去と *discours* の大過去がある。

(1) *histoire* の大過去

histoire の大過去は相対時制で、文法書などでは「過去の過去、または過去における完了」を表すとされる用法である。

a. Il *était déjà parti* quand je suis arrivé. 私が着いたときには彼はもう出かけていた。

b. Cet enfant n'*avait jamais vu* la mer jusqu'alors.

その子はその時まで一度も海を見たことがなかった。

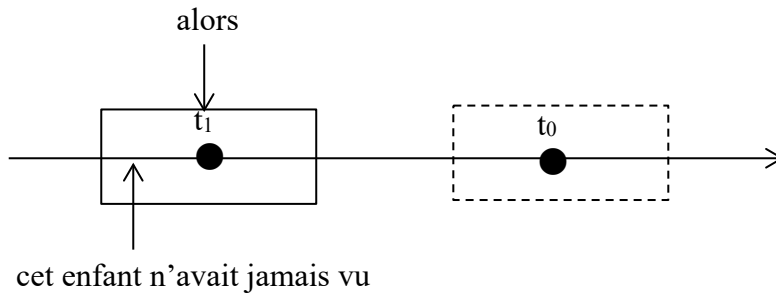
(目黒士門『現代フランス広文典 改訂版』白水社、2015)

c. Peu de gens *étaient levés*. Par -ci par-là, seulement, une lumière restait allumée, sans doute parce qu'il y avait des enfants qui *s'étaient levés* de bonne heure pour se précipiter vers l'arbre et les jouets. (G. Simenon, *Un Noël de Maigret*)

起きている人はわずかしかなかった。ただそこここに明かりが点いていた。おそらく朝早く起きてツリーとおもちゃに駆け寄った子供がいるのだろう。

(2) *histoire* の大過去

Cet enfant n'*avait jamais vu* la mer jusqu'alors.



語りモードで zone 1 は背景化され、発話時現在 (t_0)は働かない。alors が過去の時点 t_1 を設定する。 t_1 を中心とする zone 2 が形成され、大過去 n'avait jamais vu は t_1 より前に完了していた事態を表す

(3) これに対して discours の大過去はしばしば「現在と関わりのある大過去」と呼ばれ、散発的に記述されるに留まる。

- a. 大過去は複合過去または単純過去の代わりに用いられることがある。これは現在がすでに過去へ移行したように考えての美文的強勢である。

Me voici pris au piège ; on m'avait pourtant averti !

一杯くわされたぞ。だが前からそう言われていたことなんだ。

(田辺貞之助『現代フランス文法』白水社、1955)

- b. 本来、ある過去の基準点との関係において用いられるはずの大過去形が、現在形を基調とする文章の中に挿入されることがある。必ずしも論理的とは言えない用法だが、要は動作の完了ないし時間的懸隔を強調することにある。

Mais je ... on m'avait dit ... qu'il fallait souvent deux salves.

でも僕は…ずっと前に聞いたことがあるんですが…一斉射撃を二度やらなきゃならないこともよくある、とかいうことですね。

会話でよく用いられる Je l'avais bien dit ! 「ほら前に言っておいたじゃないか (言わんこっちゃない)」とか、Pardon ! Je ne vous avais pas vu. 「失礼。あなたが眼に入らなかったものですから」なども同列のもの。

Ernestine sort pas là où elle était venue.

エルネスティーヌ、先ほど登場した場所から退場。

(新倉俊一他『フランス語ハンドブック』白水社、1979)

- c. 現在と関係して用いられる大過去

現在との隔たりを強調し、直・大の行為が現在の事実と対立する。

J'avais cru avoir le temps dans l'après-midi.

午後には暇があると思っていたのだが (暇がなかった)

C'est vrai. Je n'y avais pas pensé.

そうだ、忘れていた (今思い出した)

Je n'avais jamais remarqué que vous étiez Presque de la même taille.

君たちがほとんど同じ背たけだということは今まで一度も気がつかなかったよ(今、気がついた)

過去に完了していた事実(直・大)が現在の状況とつながりがあることを示す。

Apporte-le. — Tu avais défendu qu'on y touche !

「それを持っておいで」「あなたは触ってはいけないと言ったじゃありませんか」

Et ces fleurs ? Je vous avait dit de ne pas mettre de fleurs !

この花はどうした。花を生けるなと言っておいたじゃないか。

(朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社、2002)

- (4) 普通一般、現在にかかわる大過去の説明には「現在からの隔たりの強調」という表現が用いられるが、それは大過去を複合過去から峻別する基準にはならない。《隔たり》にしても《強調》にしても、程度問題であり、伸縮自在だからである。(…)そこで、2.で見た《中断》・《対立》・《予想の実現》を統括する上位概念として《不連続》という概念を想定してみよう。(…)

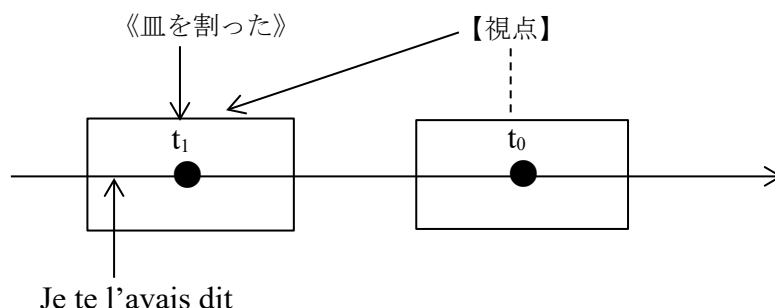
『フランス文法事典』の例文 *Je n'y avais pas pensé.* は、次のように解釈される：「そのことは考えたことがなかった」→しかし、←「なるほどそうだ」。このように《不連続》の大過去により相手の主張を認めたことまで示されるのに対して、これが複合過去 *Je n'y ai pas pensé.* であれば、単に「そのことは考えたことがない」ということであり、相手の主張には必ずしも同意していないことが示される。

(西村牧夫「現在に関わる大過去」、東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語学の諸問題』三修社、1985.)

(5) discours の大過去の説明

[うっかりして皿を割ってしまった人に]

Je te l'avais bien dit. だから言わないこっちゃない。



discours モードなので、発話時現在 (t_0)は働いており、デフォルトで zone 1 がある。言語的に表現されていない「皿を割る」出来事が過去の時点 t_1 を設定し、それを中心として zone 2 が形成される。大過去 *Je te n'avais bien dit.* は t_1 より以前に完了している事態を表す。視点は発話時現在(t_0)にある。「気を付けるように」と言って

おいたにもかかわらず皿を割った時点で、過去領域と現在領域のあいだに断絶が生じる。

「気を付けるように言っておいた」

→にもかかわらず「皿を割った」←「現在皿は割れている」

この用法の重要な点は、言語的に表現されていない「皿を割った」という出来事が大過去の基準点となるということである。

(6) [Léa と Blanche は Alexandre が一人でレストランにいるのを見かけて、中に入り話し始める。そこへ Alexandre の恋人の Adrienne が入って来る]

Adrienne : Alex, enfin, ça fait une demi-heure que je te cherche !

Alexandre : Je t'avais pourtant donné rendez-vous ici !

Adrienne : Hein ? Tu m'avais dit : « Au restaurant de la grande place. »

Alexandre : Non, j'avais dit celui-ci, mais tu n'écoutes pas.

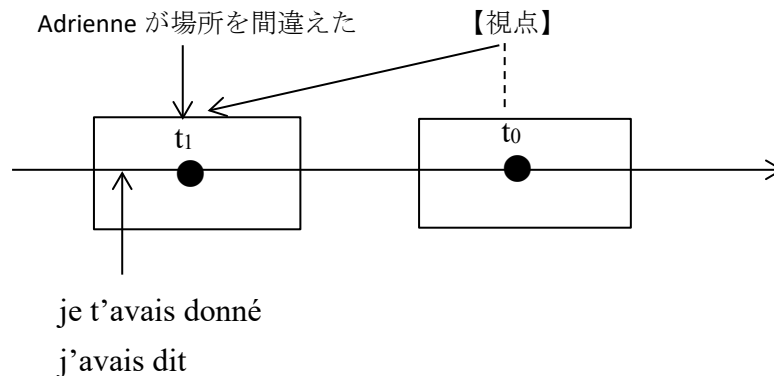
(E. Rhomer, *L'ami de mon amie*)

Ad. : アレックス。やっとまあ、30 分もあなたを探していたのよ。

Alex. : でもここで待ち合わせと言ったじゃないか。

Ad. : なんですか。あなたは「グランド・プラスのレストランで」って言ったのよ。

Alex : いや、ここでと言ったよ。君は人の言うことを聞かないんだから。



(7) discours の大過去は絶対時制か？

「現在と関わりがある」という意味においては discours の大過去は絶対時制的な性格を帯びていると言える。しかし上に示したように、このタイプの大過去は言語的に表現されない出来事を基準点としているので、通常の基準点を持つ相対時制としての大過去の延長線上で捉えることができる。discours の大過去が絶対時制か相対時制かという問はあまり実質的な意味を持たない。

10. 過去時制の出来事に後続する出来事を表す大過去

(1) 複過が直・現に後続し (→ passé composé II, A, 3⁰)、前過が単過に後続する行為

を表すことがあるように (→ *passé antérieur* II, 1⁰)、直大も他の過去時制で表された行為より後で行われた行為を表しうる。

Joseph le vit remettre ses gants et s'éloigner entre les arbres. Au bout d'une minute, Praileau *avait disparu*. (ID, *Moïra*, 245)

ジョゼフは彼がまた手袋をはめ、木立の中を遠ざかっていくのを見た。1 分後にプレーローは姿を消していた。

Vous lui avez fermé la bouche en l'embrassant, mais le lendemain matin, vous *aviez oublié*. (Butor, *Modif.*, 145)

あなたはキスをして彼女の口をふさいだが、翌朝には忘れていた。

(朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社 2002)

(2) 談話という観点から見ると、入力された時制を持つ節 (文) は「あなたが保持している現在の中心場面をアップデートせよ」という指令である。しかし中心場面のアップデートには 2 種類ある。

(A) 中心場面を時間的に後続する次の場面へと切り替える。このとき語りの時間は前に進む。単純過去や複合過去などの *aspect global* の時制を持つ文は、場面を切り替えて時間を前に進める。

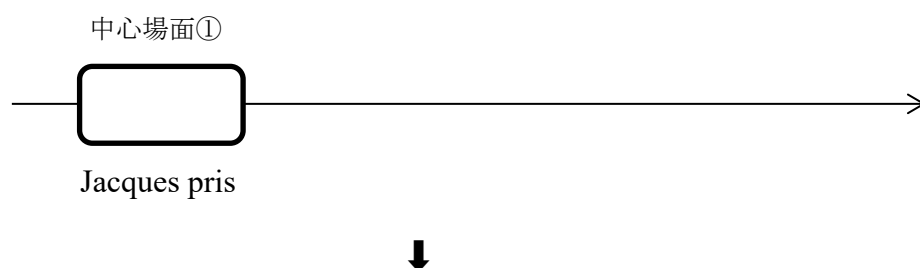
cf. This is in line with the DRT view that a new event in a narrative discourse will automatically be interpreted at an updated reference time, creating the impression that time “moves forward” and lending temporal coherence to the discourse.

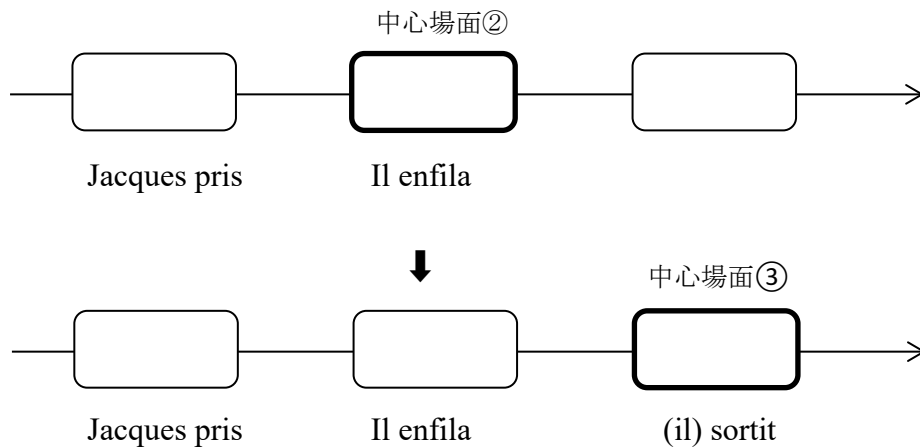
(M. Caenepeel, “Aspect and text structure”, *Linguistics* 33, 1995)

この点は談話表示理論と一致していて、語りに新たな出来事が導入されると自動的にそれはアップデートされた基準点において解釈される。そして時間が「前に進む」という印象が生まれ、談話に時間的な一貫性が与えられるのである。

ex. Jacques *pris* le petit déjeuner en hâte. Il *enfila* son pardessus et *sortit*.

ジャックは急いで朝食をかき込んだ。コートをはおると出かけた。





中心場面の移動は動詞の時制だけでなく、時の副詞などが行なうこともある。

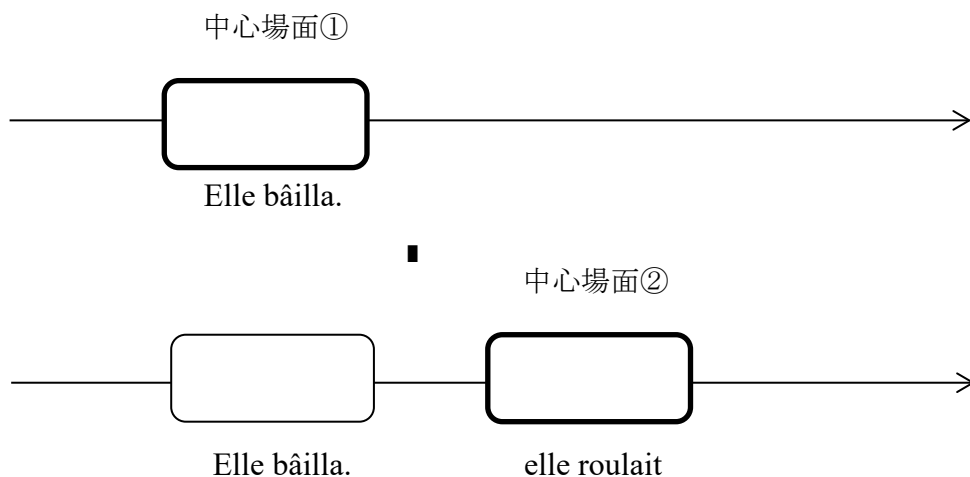
ex. Elle bâilla. Elle allait prendre la voiture et suivre le vent de printemps assez loin dans la campagne. Elle ne travaillerait pas plus aujourd'hui que les autres jours. Elle en avait, grâce à Charles, perdu l'habitude.

Une demi-heure plus tard, elle *roulait* sur l'autoroute de Nancy.

(F. Sagen, *La chamade*)

彼女はあくびをした。これから車に乗り、春の風を追って田舎まで遠く走るのだ。いつもと同じように今日も仕事はしない。彼女はシャルルのおかげで働く習慣をなくしていた。

半時間後、彼女はナンシーに続く高速道路を走っていた。

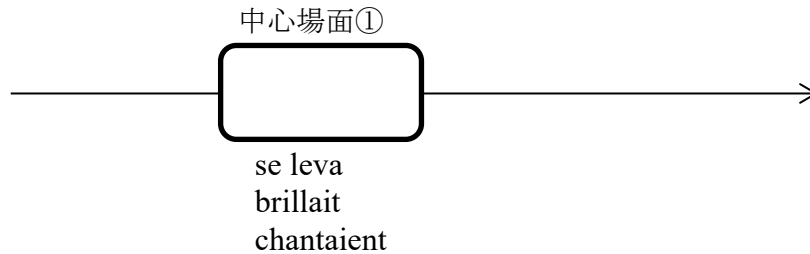


(B) 中心場面はそのままに保ち、その場面の中にさらに情報を書き加える。このとき語りの時間は前に進まず停滞する。半過去のような *aspect sécant* の時制を持つ文は、場面を切り替えない。

ex. Ce matin, Jacques *se leva* de bonne heure. Le soleil *brillait* et les oiseaux *chantaient*

dans le bois du parc près de chez lui.

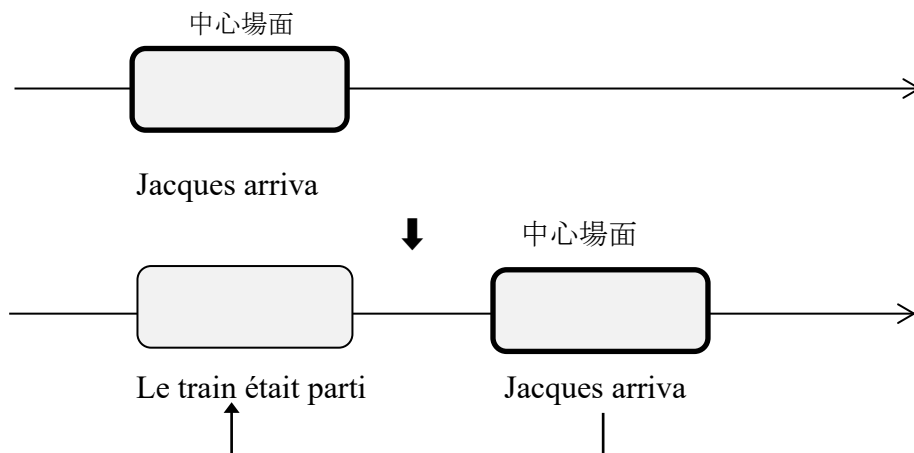
今朝、ジャックは早く起きた。太陽は輝き、近くの公園の林では小鳥たちがさえずっていた。



(3) 大過去は中心場面を切り替えない。大過去があるからといって、中心場面が過去方向に移動することはない。

ex. Jacques arriva à la gare, mais le train *était déjà parti*.

ジャックは駅に着いたが、列車はもう出ていた。



(4) Elle *attendait* ①, comme chez le dentiste, que la porte s'ouvrît.

L'appartement 306 comprenait une suite au deuxième étage avec une vue sur la mer, le portier le lui *avait dit* ②. Dans sa chambre personnelle dont la vue reposante donnait sur les jardins, elle *avait trouvé* ③, la veille, en arrivant, une corbeille de fleurs accompagnée d'un mot de bienvenue.

Le soir, elle *reçut* ④ un appel téléphonique l'avertissant que la personne qu'elle devait contacter la recevrait le lendemain mais qu'elle pouvait se reposer, sortir, aller danser, faire une promenade en mer, se rendre chez le coiffeur. Un compte en argent français lui était ouvert, elle n'avait qu'à se faire connaître à la réception.

On lui *souhaita* ⑤ un agréable séjour et elle n'*eut* ⑥ plus qu'à raccrocher sans connaître l'identité de son interlocuteur.

Hildegarde *avait donc été* ⑦ se faire coiffer à l'institut de beauté de l'hôtel, *avait donné* ⑧ ses robes à repasser à la femme de chambre et *avait acheté* ⑨ des bas.

Le lendemain, au téléphone, une secrétaire *prit* ⑩ courtoisement de ses nouvelles et lui *fixa* rendez-vous pour l'après-midi, quatre heures, à l'appartement 306.

(C. Arley, *La femme de paille*)

彼女は歯医者で順番を待つように、ドアが開くのを待っていた。

306 号のアパルトマンは 3 階にスイート・ルームがあって海が見える、と門番から聞いていた。彼女に用意された部屋は庭に面していて落ち着いた感じで、前夜に到着した時には歓迎のメッセージとともに花籠が置かれていた。

夜になって彼女に電話がかかってきて、彼女が会うことになっている人は明日お会いすると告げられた。彼女は休んでも外出してもよく、ダンスに出かけたり船遊びをしたり美容院に行ってもよいということだった。彼女のためにフランスのお金で口座が開設されていて、フロントで名前を言うだけでよいのだった。

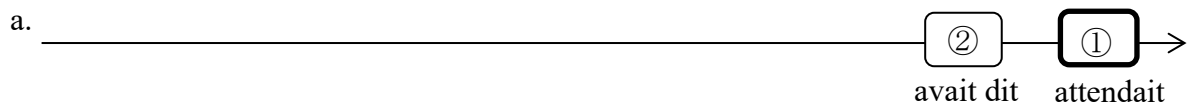
電話の相手は楽しくお過ごしくださいと言ったので、彼女は受話器を置くしかなかったが、相手の名前は知らないままだった。

そこでヒルデガルドはホテルの美容室で髪をセットし、アイロンをかけるようにとドレスをメイドに渡し、ストッキングを買った。

翌日電話がかかってきた。秘書が懇懇にご機嫌はいかがですかとたずね、午後の 4 時にアパルトマン 306 でお待ちしていると彼女に告げた

中心場面

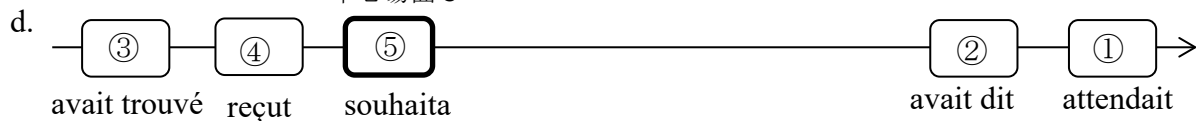
1



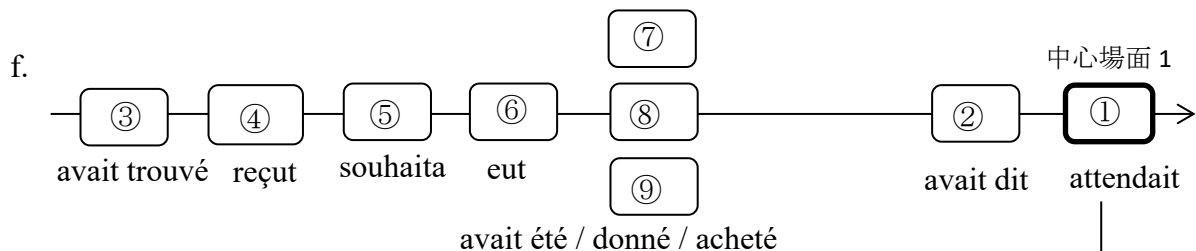
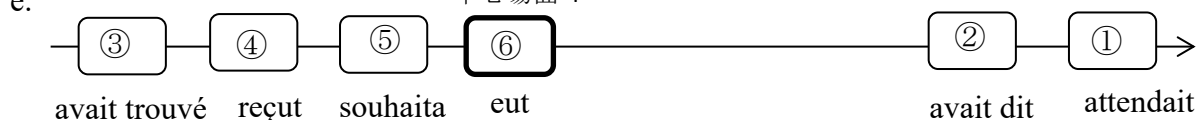
中心場面 2

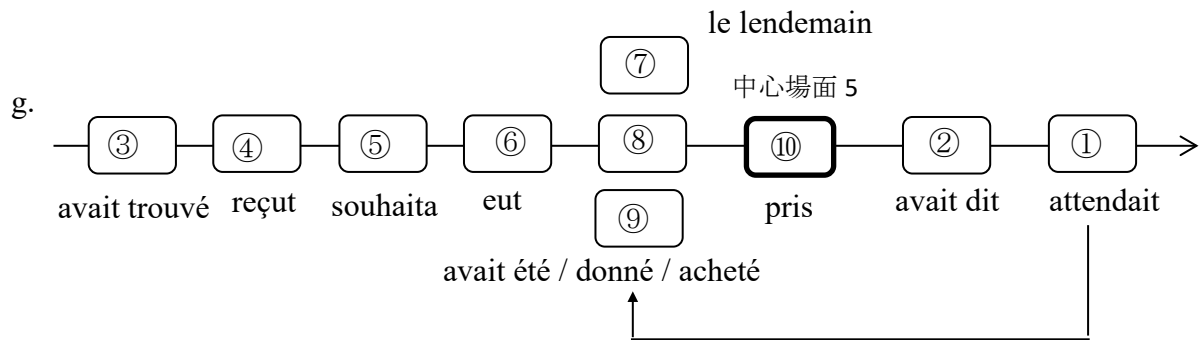


中心場面 3



中心場面 4





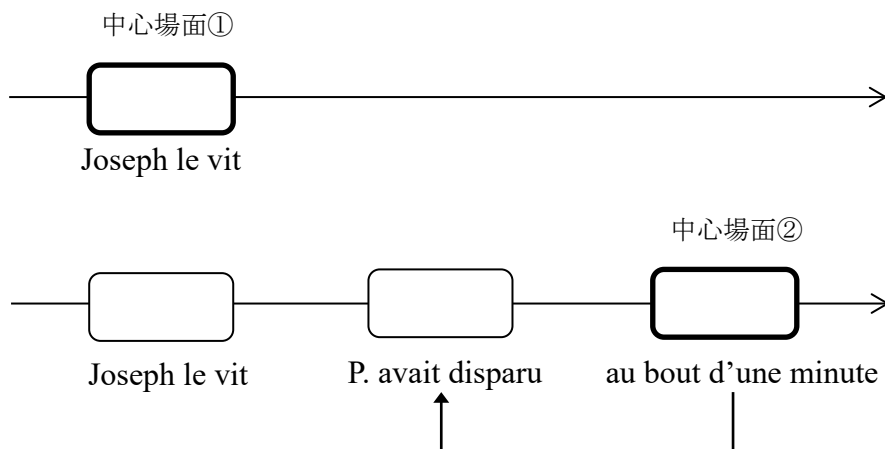
上の f.の大過去 ⑦ *avait été* ⑧ *avait donné* ⑨ *avait acheté* が相対時制として従属しているのは、直前の単純過去 ⑥ *eut* でもなく、直後の単純過去 ⑩ *pris* でもない。冒頭 a.で中心場面であり、いったん中心場面でなくなった ① *attendait* に従属していると考えられるべきである。

(5) 「大過去は他の時制が表す出来事に後続する出来事を表すことがある」という朝倉の指摘はまちがいである。

Joseph le vit remettre ses gants et s'éloigner entre les arbres. Au bout d'une minute, Praileau *avait disparu*. (ID, *Moïra*, 245)

ジョゼフは彼がまた手袋をはめ、木立の中を遠ざかっていくのを見た。1 分後にプレローは姿を消していた。(朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社 2002)

上の例で大過去 *avait disparu* が単純過去 *vit* より後の出来事を表すというのは、時制の束縛関係を正しく捉えてはない。*avait disparu* は時の副詞 *au bout d'une minute* が設定する中心場面②に束縛されて、それより「前・完了」を表す。*vit* と *avait disparu* の間には束縛関係がないため、両者の間に時間的前後関係は存在しない。



(6) テキスト構造と時制

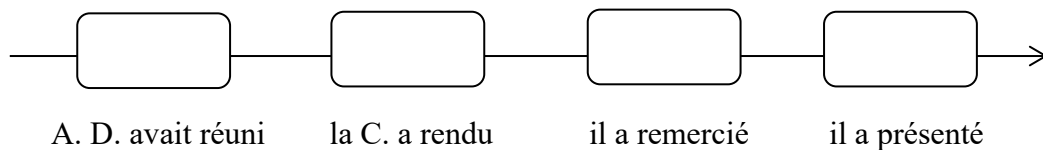
En avril dernier, pour fêter l'hommage que la Cinémathèque *a rendu* à sa carrière, Alain Delon *avait réuni* ses amis. Il *a d'abord remercié* ses collaborateurs, puis il *a présenté* les

deux plus beaux « films » de sa vie : ses enfants Anouchka et Alain-Fabien,

去る 4 月のこと、シネマテークが映画人としての功績に対して与えた栄誉を祝うため、アラン・ドロンは友人達を招待してパーティーを開いた。彼はまず協力して映画を制作した人達に感謝の言葉を述べ、次に自分の生涯で最高の「映画」である 2 人の子供、アヌーシュカとアラン=ファビアンを紹介した。

【間違った解釈】

次のように大過去 *avait réuni* が複合過去 *a rendu* より過去を表すとしたら、受賞する前にパーティーを開いたことになってしまう。

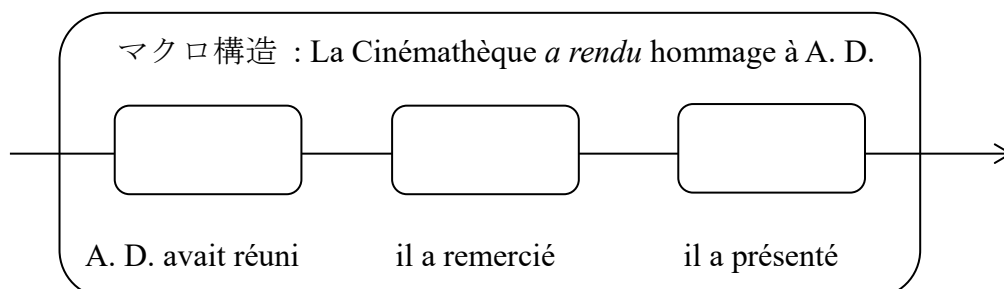
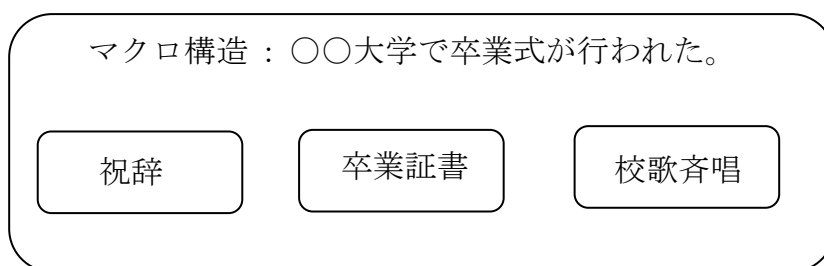


【正しい解釈】

大過去が表す時間関係を正しく解釈するためには、談話のエピソード構造を考慮しなくてはならない。談話のエピソード構造には、マクロ構造とミクロ構造がある。マクロ構造は時間的・空間的にある程度の大きさを持つ出来事を包括的に捉える。新聞の見出しがほぼそれに当たる。一方、ミクロ構造は時間的・空間的にもっと小規模の出来事を起きた順番に述べる。

ex. 昨日、〇〇大学で卒業式が行われました。

最初に△△学長が大学で学んだことを社会に生かしてくださいと祝辞を述べました。次に各学部の代表に卒業証書が手渡され、最後にオーケストラの伴奏で校歌を歌って、卒業式は終了しました。



Alain Delon *avait réuni ses amis*. の大過去は、伝達したい中心的話題である祝賀パーティーの様子にたいして、背景となる情報を提示する役割を持つ。

(7) 単純過去に続いて現れる大過去

Un peu avant le dîner, nous *ressortîmes*. Edmondsson *m'avait pris* la main et nous *marchions* lentement dans les rues, nous arrêtant pour lire les affiches qui *présentaient* les concerts, les spectacles, les affiches qui *faisaient* part des décès.

(J. Ph. Toussaint, *La salle de bain*)

夕食の少し前、また外に出た。エドモンドソンがぼくの手を取って、二人でゆっくり町を歩き、立ち止まっては、壁に貼ってあるコンサートや映画・演劇のポスター、死亡通知の張り紙を読んだ。(野崎敏訳『浴室』集英社)

やはりこれらの例においても、大過去は直前の単純過去で表されている事態よりも時間的に後に起こっている。これらの例の大過去は(…)先行する単純過去との相対的な時間的前後関係で用いられているのではなく、それぞれの大過去の後に現れて意味的に密接な関係にある半過去が表す事態との時間的前後関係で用いられているのである。(…)これらの例に見られるような、〈単純過去→大過去→半過去〉というテキスト構成の中の単純過去は、先行する事態を表すと言うより、包括的にある事態を述べ、次に続く半過去や大過去でその事態の内容が具体的に述べられているとも考えられる。この点については、テキスト構成の観点からさらに検討が必要である。

(春木仁孝「現代フランス語の大過去とテンス・アスペクト」『言語文化研究』26号、大阪大学言語文化部・言語文化研究科、2000)

11. 単純過去に後続する前過去

(1) 前過は完了相を表すだけで、時間的に単過に後続し得る。

Il gratta une allumette que le vent *eut vite éteinte*. (Bedel, *Jérôme*, 104)

マッチをすったが風がすぐにそれを吹き消した。

Il (...) se promet d'enquêter dans son entourage, mais il *eut* bientôt cessé d'y penser.

(Aymé, *Chemin*, 8)

周囲の人達に聞いてみようと思ったが、じきにこのことは考えなくなってしまった。

(朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社)

(2) 前過去の時制的意味価値

単過の完了形で、行為の完了状態の開始を示す。直・大と異なり、継続・反復・習慣を表わさず、描写には用いられない。行為の完了の結果としての状態を表わさない。

¹⁰ 独立節 多くは行為の急速な完了を表わすと説かれる。この場合、*vite*, *tôt*, *bientôt*, *en un moment*, *en deux minutes* などの副詞を伴うのが普通

Le cheval l'eut vite rattrapé. 馬はすぐ彼に追いついてしまった。

2⁰ 従属節 après que, aussitôt que, dès que, lorsque, quand などに先立たれる従属節、または à peine que, ne pas plus tôt... que, ne...pas...que を含む文に用いられて、普通は単過で表される他の行為と関係して、多くはその直前に完了した一回限りの瞬間的行為を表す。

Quand elle eut disparu dans l'immeuble solennel, il se mit à descendre à pied vers la Seine. 彼女がどっしりとしたビルの中に姿を消したとき、彼は歩いてセーヌのほうに下り始めた。
(朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社)

(3) a. Mais dès qu'elle [la mère Bovary] { fut partie / *était partie }, Emma ne tarda pas à émerveiller Bovary par son bon sens pratique. (Flaubert, *Mme Bovary*)

しかし彼女が出て行ってしまうと、すぐさまエンマはその実地的な良識でボヴァリーを驚嘆させた。

b. Quand Mme Bovary { était partie / *fut partie }, il [Charles] essayait de hasarder timidement, et dans les mêmes termes, une ou deux anodines observations qu'il avait entendu faire à sa maman. (Ibid.)

ボヴァリー夫人が行ってしまうと、彼はいつか母が言うのを聞いたことがある邪気のない批評を同じ言葉でおずおずと口にするのだった。

c. Une nuit, vers onze heures, ils [M. et Mme Bovary] furent réveillés par le bruit d'un cheval qui { s'arrêta / *se fut arrêté / s'était arrêté } juste à la porte. (Ibid.)

ある夜の 11 時頃、彼らはドアのすぐ前に止まった馬の物音で眼が覚めた。

(大久保伸子「前過去と大過去」『フランス語フランス文学研究』71, 1997)

(4) 大過去と前過去の働きのちがい

It seems to us that the plus-que-parfait and the passé antérieur have in common that they place the event of the sentence before a reference point. The difference is that the plus-que-parfait places the event before a reference point which was already present in the preceding text and that the passé antérieur places it before the (newly) introduced reference point of the main clause which has to contain a ps. [=passé simple] The instruction given by a sentence in the passé antérieur has to be something like:

(21) If a sentence has the following form: Temporal Conjunction pa-S1, ps-S2, introduce a reference point R, introduce for S1 an event e1 and place it before R, introduce for S2 an event e2 so that e2=R

(Co Vet & A. Molendijk, "The discourse functions of the past tenses of French", V. Lo Casio et al. (eds) *Temporal Structure in Sentence and Discourse*, Foris, 1986)

大過去と前過去は出来事を基準点より前に定位するという点では同じである。ちがうのは、大過去がそれまでのテキストにすでにある基準点の前に出来事を定位するのにたいして、前過去は、単純過去を持つ主節が（新しく）導入する基準点の前に出来事を定位することである。前過去を含む文によって与えられる指令はおおむね次のようになる。

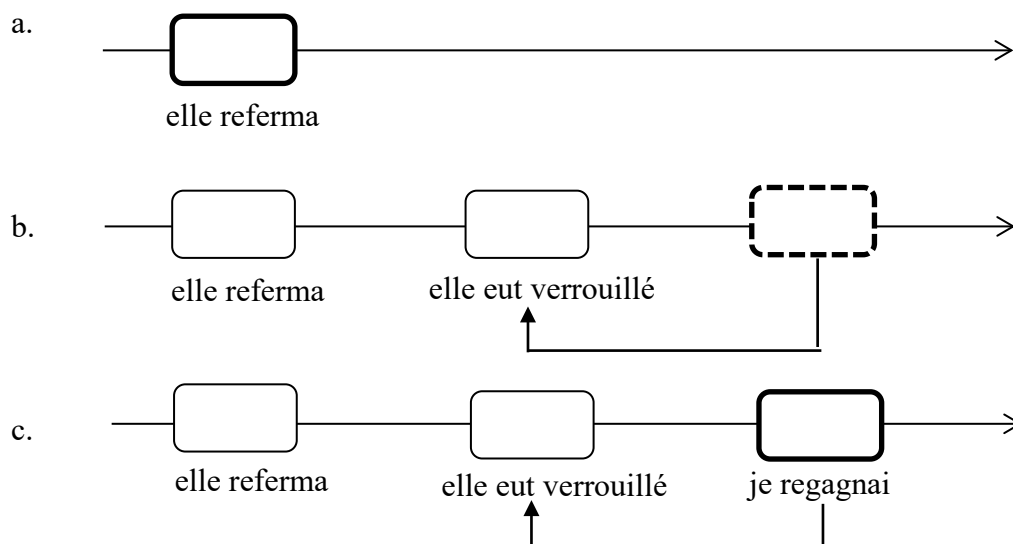
- (21) もし文が、[時の接続詞—前過去の文 1、単純過去の文 2] という形式をとっていたら、基準点 R を導入し、文 1 の出来事 e1 を R より以前に置け。文 2 の出来事 e2 を e2=R となるように導入せよ。

【例示と解説】

Enfin elle *referma* ma porte. Quand elle *eut verrouillé* la sienne (e1), je *regagnai*, dans le cabinet de toilette, mon poste d'écoute. (e2)

そして彼女は私の部屋のドアを閉めた。彼女が自分の部屋のドアに鍵を掛けると (e1)、私は洗面所で聞き耳を立てるべくいつもの場所に戻った。(e2)

前過去 *elle eut verrouillé* は、その前の単純過去 *elle referma* と束縛関係にないので、両者の間に時間関係は存在しない。*quand* 節で用いられた前過去は統語的強制によって必ず主節の束縛を受ける。したがって時間関係は前過去 *elle eut verrouillé* と、後続する単純過去 *je regagnai* の間にだけ存在する。



上の図 b.で前過去 *elle eut verrouillé* は中心場面を設定しない。後続する中心場面（破線の四角）を予備的に設定すると同時に、その中心場面に束縛された場面をそれより前に設定する。主節の単純過去 *je regagnai* は予備的に設定された中心場面（破線の四角）に重なるように場面を設定する。

- (5) PA [=passé antérieur]も PQP [=plus-que-parfait]も過去のある時点では既に完了した事行を表す完了時制である。この過去のある時点を基準点と呼ぶことにすると、PAとPQPの基準点の決まり方は全く異なっている。

PQPの場合、基準点は主体の居る場であり、事行は主体が居る場から回顧方向に振り返る形で捉えられる。(…) PC [=passé composé]の場合、主体の位置する基準点は発話時点であり、単純明快である。PQPの場合、主体の居る場の定まり方は様々である。(22)では、はじめに出てきた状況補語 (*Ce matin-là*)により主体の居る場が定められる。(…)

- (22) Ce matin-là, j'étais très en retard pour aller à l'école, et j'avais grand'peur d'être grondé, d'autant que M. Hamel nous avait dit qu'il nous interrogerait sur les participes, (...)

その日の朝、ぼくは学校にすごく遅刻した。ぼくは叱られるのをひどく恐れたいたのだが、それもハメル先生がぼくたちに分詞についてテストすると言っていたからだ。(訳は東郷による)

(…) PQP の基準点は、談話レベルで一旦主体の居る場が確定すれば、個々の事行毎に基準点を形成する必要がなく、多くの場合、一つの時点が複数の IMP や PQP, CON の基準点となる。

一方、PA の基準点は非常に厳密な統語論的枠組で決められている。独立節の PA は別として、普通、PA の基準点は主節の PS の事行時点である。(…)

PA の基準点は主節の PS が出てくる時まで虚構のままで不安定である。後に来る PS の事行を先取りして基準点とし、その時点において既に完了した筈のことを表すというのが PA の複雑な仕組みである。

(大久保伸子「前過去と大過去」『フランス語フランス文学研究』71, 1997)

(6) 独立節の制約に関して、Martinon (1927)は、独立節の PA も従属節の PA と同じ相対時制であると解釈する。独立節の PA は *bientôt, vite, à peine, en un instant* などの副詞を必ず伴っていて、(14a)は(14b, c)のように言い換えることができる。これは副詞が動詞の代わりをしているというのである。

- (14) a. *En quelques instants, il eut fini.* (Martinon 1927)

あっという間に彼は終えてしまった。(訳は東郷による)

- b. *Quand il eut fini, quelques instants à peine s'étaient écoulés.*

彼が終えた時、ほんの少ししか時間が経っていなかった。

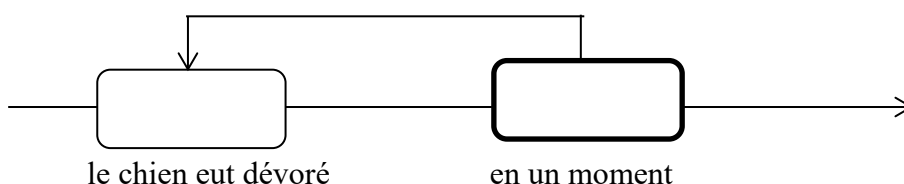
- c. *Quand quelques instants se furent écoulés, il avait déjà fini.*

わずかな時間で彼は終えてしまっていた。(大久保、同論文)

cf. Martinon, Ph., *Comment on parle en français*, Larousse, 1927

【解説と考察】

Le chien eut dévoré la viande en un moment. (犬はあっというまに肉を食い尽くした)のような独立節で用いられ急速完了を表す前過去について、Martinon が相対時制だと述べているのは示唆的である。相対時制ということは、自ら中心場面を設定せず、他の中心場面に束縛されるということを意味する。中心場面を設定するのは *bientôt* などの時の副詞である。副詞は時間を前に進める力がある。



(7) したがって次の朝倉の指摘は誤りである。

前過は完了相を表すだけで、時間的に単過に後続し得る。

Il gratta une allumette que le vent *eut vite éteinte*. (Bedel, *Jérôme*, 104)

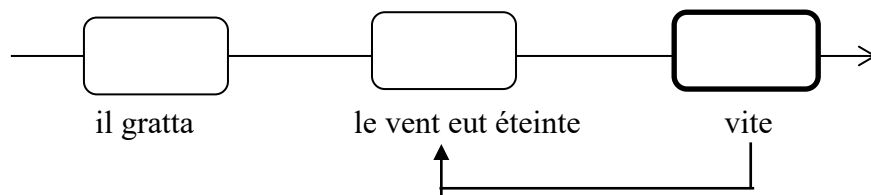
マッチをすったが風がすぐにそれを吹き消した。

Il (...) se promet d'enquêter dans son entourage, mais il *eut bientôt cessé d'y penser*.

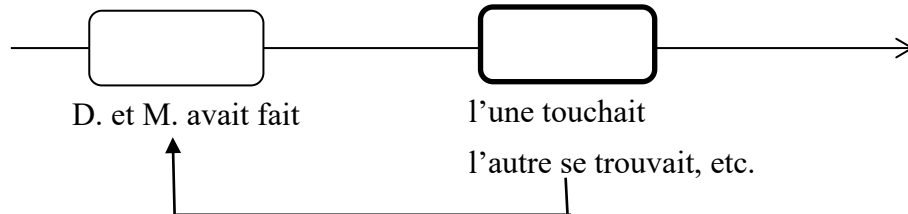
(Aymé, *Chemin*, 8)

周囲の人達に聞いてみようと思ったが、じきにこのことは考えなくなってしまった。

(朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社)



で、大過去の使用は自由度が高い。中心場面(=基準点)を設定する前に大過去を用いると、「中心場面がその後に来る」という談話的予測が生まれる。このため「読者の好奇心をそそる」などと説明されるのである。



12. quand 節と大過去

(1) 正規の構文では、主節の単純過去、複合過去に対して、時を表す従節に大過去を用いない。従って *Quand il avait fini, il s'en alla.* は正しくない。(正 : *Il avait fini, quand il s'en alla.* 或いは陰影は異なるが、*Quand il eut fini, il s'en alla.*)

(朝倉季雄『フランス文法事典』白水社、1955)

(2) *Il avait écrit sa lettre quand elle est entré / entra.*

彼は手紙を書き終えた。すると彼女が入ってきた。

時の接続詞 *quand* などで結ばれたこの構文では、**Quand il avait écrit sa lettre* ～は誤用とされる。(佐藤房吉他『詳解フランス文典』駿河台出版社、1991)

(3) しかし実例がないわけではない。

a. *A peine s'était-il recouché en arrière avec une expression d'aise intense, les bras ballants, les jambes tendues devant lui pour s'aérer les pieds, qu'un serveur vint lui dire qu'on le demandait au téléphone.*

(J. Ph. Toussaint, *La salle de bain*、春木仁孝「現代フランス語の大過去とテンス・アスペクト」『言語文化研究』26号、2000に引用)

非常な満足感を浮かべてもう一度後ろにそり、腕をぶらぶらさせ、足に風をあてようと両足をぴんと伸ばしたところに、ボーイがやって来て、電話がかかっていると告げた。(野崎敏訳『浴室』集英社)

b. *Alors il revint dans sa chambre et se recoucha. Mais à peine avait-il éteint qu'aussitôt la chose inexprimable se réinstalla près de lui.* (Barres, in Imbs, *L'emploi des temps verbaux en français moderne*, Klincksieck, 1960)

そこで彼は自分の部屋に戻り、またベッドに入った。ところが灯りを消すや否や、曰く言いがたいものが彼のそばにまた現れたのだ。

c. *Il s'en alla dès qu'il m'avait vu.*

彼は私を見るや立ち去った。(目黒士門『現代フランス広文典』白水社、2015)

(4) 従属節が〈*quand*＋大過去〉、主節が半過去の例はごくふつうにある。一度きりの出来事ではなく、反復・習慣を表す。

- a. *Sitôt que le chien avait achevé un morceau, il jappait pour réclamer le suivant.*

犬は一切れを食べてしまうと、次をせびるために吠えたてるのだった。

(朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社、2002)

- b. *Dès que sa mère était revenue des vêpres, il lui consacrait la fin de la journée.*

母親が晩課を済ませて帰ってくると、彼はゆうべの時間を彼女のために当てるのが常だった。(Ibid.)

- c. *Quand il avait dîné, il allait faire un tour.*

彼は夕食をすませると散歩に出たものだ。

(目黒士門『現代フランス広文典』白水社、2015)

(5) フランス語の時制体系の中での単純時制・複合時制の組み合わせ

- a. 現在形—複合過去形

Il dit n'importe quoi quand il a bu.

彼は酒を飲むとでたらめを言う。

- b. 半過去形—大過去形

Il disait n'importe quoi quand il avait bu.

彼は酒を飲むとでたらめを言うのが常だった。

- c. 単純未来形—前未来形

Je ralentirai dès que j'aurai aperçu un agent de police.

警官を見かけたらすぐにスピードを落とすよ。

- d. 単純過去形—前過去形

À peine eut-il raccroché que le téléphone sonna.

彼が受話器を置くやいなや電話が鳴り出した。

【考察】

助動詞の形態を見てもわかるように、大過去形は半過去形とペアをなす複合時制である。大過去形は半過去形にたいして先行性 (antériorité) または完了を表すが、半過去形は未完了時制であるため、一回切りの点的な出来事を表さない。このために〈半過去形—大過去形〉のペアにおいても、全体として未完了アスペクトである反復・習慣を表すことになると考えられる。

(6) 時の接続詞 *quand* の働き

quand 節の機能は、主節の事態が生起したのがいつであることを示すために場面の特定を行うことにある。そのためには、*quand* 節において用いられる時制の解釈が主節とは独立した形で得られる必要がある。

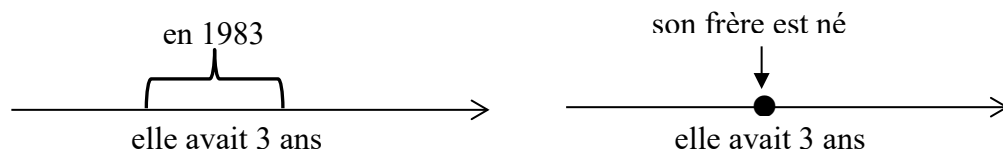
(高橋克欣『「こと」の認識と「とき」の表現』、京都大学学術出版会、2016)

【解説と考察】

- a. *En 1983, elle avait 3 ans.* 1983 年に彼女は 3 歳だった。

- b. *Quand son frère est né, elle avait 3 ans.* 弟が生まれたとき彼女は 3 歳だった。

Elle avait 3 ans. 「彼女は 3 歳だった」は単独では容認しにくい文である。「いつのことか」がわからないからである。en 1983 を付加すると文は安定し容認される。Quand son frère est né は時の副詞と同じく主節が表す出来事を時間軸上に定位する。quand 節は主節とは独立に時間軸上で時点あるいは期間を定めることができなくてはならない。



(7) 大過去の基本的意味価値は過去完了である

直・大は完了相でとらえられた直・半で、主節・従属節、文語・口語の別なく用いられて、直・半と同様に多彩な陰影を帯びる。

1⁰ 完了した行為の結果である過去の状態

直・半が行為の初めも終わりも示さないように、結果である状態の初めも終わりも示されない。

Le 20 octobre, il *avait terminé* son roman. 10 月 20 日には彼は小説を書き終えていた。

◆書き終えたという状態は 10 月 20 日以前に始まり、この日付でも継続していたことを示す。

Quand il parvint à la gare, le train de midi *était parti*.

駅に着いたとき、正午の列車は発車した後だった。

◆前過と異なり、完了の結果は継続する。

(朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社、2002)

【考察】

半過去は事態の開始点も終了点も表さない。このため quand 節で用いられると事態を時間軸上に定位する力がないので容認されない。

??Quand il *dormait*, le téléphone a sonné. 彼が寝ているとき電話が鳴った。

quand 節で大過去が使えないのも同じ理由によると考えられる。大過去も半過去と同じく開始点も終了点もない結果状態を表すのが本来の用法である。

a. Le lendemain, au réveil, l'abcès de mon oreille *s'était ouvert* tout seul.

翌日、目を覚ますと、耳のできものは自然にウミが出ていた。

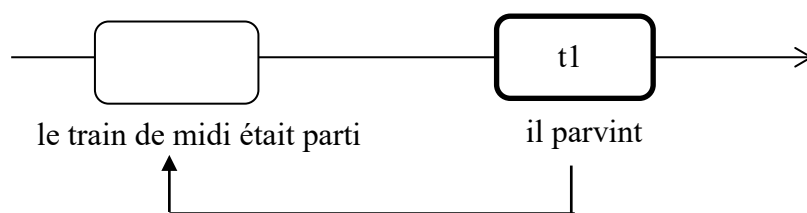
(鷲見洋一『翻訳仏文法』ちくま学芸文庫)

b. Ils allaient partir lorsqu'il fit brusquement demi-tour et remonta : il *avait oublié* la charge de bois que sa mère lui *avait demandé* de rapporter.

そのまま出て行きそうになって、引き返した。母親から頼まれた焚きつけの束を忘れたのである。(Ibid.)

(8) Quand il parvint à la gare, le train de midi *était parti*.

駅に着いたとき、正午の列車は発車した後だった。



この例では大過去 *le train était parti* は、*il parvint* の時点 *t1* より前に起きて「列車はもういない」という結果状態を残していることを表している。しかし大過去は *t1* の時点において既に完了していたことだけを表し、「いつ起きたのか」は表さない。

13. 前過去と大過去再考

(1) 注意しなくてはならない誤解がある。多くの文法書は前過去について、「主節の出来事の直前に完了した出来事を表す」としている。

【実例】

「(前過去は) 接続詞句 *quand, lorsque, aussitôt que, dès que, après que, à peine ... que* などで導かれ、主節の単純過去が示す動作の直前に完了した動作を示す。主節の単純過去に対して〈継起関係〉と〈直前の完了〉を示すことが前過去の特徴である。

Aussitôt qu'il eut compris la plaisanterie, il se mit à rire.

冗談だと分かると彼はすぐ笑い出した」

(目黒士門『現代フランス広文典』白水社、2015 下線は引用者による)

一方、大過去については逆に「主節の表す出来事から時間的に隔たった過去を表す」とするものがある。

【実例】

「大過去は前過去と等しく過去のある事実の前に完了した事実を示すが、主たる過去の時との間に相当の時間的隔たりがあり、かつ前過去のように一時的でなく、継続、習慣の意を含む。

Quand nous sommes arrivés, le festin était déjà fini.

僕らが着いたときには、宴は既に終わっていた。

Le debris d'une natte annonçait que cet asile avait été jadis habité.

蓆の切れ端が、かつてこの隠れ場に人が住んでいたことを物語っていた。」

(田辺貞之助『現代フランス文法』白水社、1955、p.291 下線は引用者による)

(2) ところが「前過去が直前の完了を示す」というのも、「大過去が時間的に隔たった過去を表す」というのも誤解である。

a. 「前過去形は単純過去形の完了形であって、「直前の」完了を示すのが本来の価値ではない。*dès que, aussitôt que* と共に用いれば接続詞相当句の意味からして直前

になるし、*quand, lorsque* と共に用いれば完了の瞬間が主節の単純過去形と同時に
なるから、2 つの動作が間を置かずに相次ぐ、というだけのことだ。接続詞相当句を
après que に変えれば、直前とはならない。

1) *Pourtant, quelques années après que la guerre eut pris fin, Mlle Mesureux commença d'éprouver une soured inquiétude. — Kessel, Nuit de prince, 4.*

とはいえ、戦争が終わってから何年かたつと、ムズル嬢はかすかな不安を覚えはじめた。」

(朝倉季雄『フランス文法メモ』白水社、1984, p.86 下線は引用者による)

b. le plus-que-parfait

Le plus-que-parfait exprime un fait accompli qui a eu lieu avant un autre fait passé, quel que soit le délai écoulé entre les deux faits :

大過去形は過去の他の事態以前に起き、完了した事態を表す。ふたつの事態の間に
流れた時間はどのようであってもよい。

Alain tourna la tête [...] vers la porte-fenêtre béante d'où venait une douce odeur d'épinards et de foin frais, car on avait tondu les gazons dans la journée.

(Colette, *Chatte*, p.203)

アランは開いた掃き出し窓のほうを向いた。そこから、ハウレンソウや新しい草の甘い香りがした。昼間に芝生を刈っていたからだ。

(Grevisse / Goosse, *Le Bon usage*, Duculot, 2011 下線は引用者による)

c. 直前完了を表す大過去形の例もある

i) *Il avait clos ses paupières, il souriait.*

彼は瞼を閉じてほほえんでいた。(朝倉季雄『新フランス文法事典』 2011)

ii) *En un quart d'heure, j'avais dîné.*

ほんの 15 分で私は夕食を終えていた。(Ibid.)

iii) *J'avais achevé ma lecture ; il entra.*

私は本を読み終えたところだった。彼が入って来た。

(新倉俊一他『フランス語ハンドブック』 1978)

(3) 時の従属節における前過去と単純過去の選択

時の従属節が表す事態が単純過去の表す事態に先行していても、従属節で必ずしも前過去が用いられるとは限らない。従属節で単純過去が用いられることもある。
朝倉季雄『フランス文法メモ』には次のようにまとめられている。

a. 瞬間的動作を表す動詞 : *apercevoir, atteindre, éteindre, reconnaître, trouver, voir* など。動作は瞬間的に終わるのだから、どちらを用いても実的に違いがない。

Dès qu'elle eut aperçu les trois jeunes gens, Madame Hervezy dit avec autorité.

3 人の若者の姿を見かけるとすぐ、H 婦人は居丈高に言った。

Celui-ci, dès qu'il aperçut Antoine, sauta de sa chaise pour venir à lui.

彼は A の姿をみとめるとすぐ彼の所に来るためにさっと座を立った。

Donna Lucrezia, dès qu'elle *eut vu* Francesco s'enfuir, retourna dans le bureau du commissaire.

D. L. は F が逃げ去るのを見ると、すぐ所長室に引き返した。

Dès qu'il me *vit*, il vint à moi.

私を見るとすぐ、彼は私の所にやってきた。

- b. 非瞬間的動作を表す動詞 : *s'approcher, arriver, partir, quitter, rentrer, sortir* など。これらは動作の終止点が明確でないから、動作が完全に終わってしまってから、次の動作に移ったことを示すためには前過去形が必要。単純過去形を用いると、動作の一部が同時になる。

Quand elle *fut sortie*, il se jeta Presque bestialement sur la gruyere et sur le pain.

彼女が外に出てしまうと、彼はほとんど獣のように、グリュイエール・チーズとパンに飛びついた。

Oh ! ne faites pas cette tête-là ! dit Lewis quand il *sortit* de la salle de bains.

そんな顔をしないでよ、とリュースは浴室から出ると言った。

Quand j'*eus quitté* Luc, j'*entrai* dans un bar.

リュックと別れてしまうと、私はあるバーに入った。

Quand je le *quittai*, il chuchota.

彼と別れるとき、彼は私にささやいた。

【考察】

朝倉は「これらは動作の終止点が明確でないから」と述べているがこれはわかりにくい。上記 a. に分類されている *apercevoir, trouver* などは瞬間動詞で事態の成立が一瞬で終わる。このため継続を表す半過去にしにくい。

i) J'*ai aperçu* un chat au toit. 私は屋根の上にネコがいるのに気づいた。

ii) ?J'*apercevais* un chat au toit.

iii) J'*ai reconnu* tout de suite Jacques dans la foule.

私は人混みの中にすぐジャックの姿を認めた。

iv) ?Je *reconnaissais* Jacques dans la foule.

これらの動詞は「事態の生起」イコール「事態の完了」となるために、あえて前過去を用いず単純過去を使っても「事態の完了」は明確になる。

ちなみに前未来形と単純未来形の選択にも同じことが言える。

v) Je *ralentirai* dès que { j'*apercevrai* / j'*aurai aperçu* } un agent de police.

警官を見かけたらすぐスピードを落とします。

一方、b. に分類されている *sortir, arriver* などは瞬間動詞のように見えるかもしれないが、容易に半過去にすることができる。

v) Quand Paul est venu, je *sortais*.

ポールが来たとき私は出かけるところだった。

vi) *Le train siffla longuement. On arrivait à la gare.*

汽車は長々と警笛を鳴らした。駅に着いたのだ。

sortir 「出かける」を例にとると、出かけるためには「服を着替える」「ドアに近づく」「ドアノブを握る」「ドアを開ける」「外に出る」「ドアを閉める」「鍵をかける」といった一連の動作が必要で、このうちのどの局面も *je sortais* が表すことができる。このように意味的に一連の動作の集合体をなすために、単純過去形の *je sortis* では事態の完了が明確でなく、ひょっとしたらまだ「ドアノブを握る」の段階かもしれない。このため事態の完了「～してしまった後に」を表すには前過去が必要になる。

c. 動詞が *finir, achever, terminer, prendre fin* など終了の意味を表すときは前過去形が必要である。

Quand la cérémonie religieuse eut pris fin, une autre fête commença.

宗教的儀式が終わったとき、別の祭典が始まった。

Quand il eut fini, il vida un verre de vin.

彼は終えてしまうと、ぶどう酒のグラスを飲みほした。

Olsson によれば集めた 4500 例のうち、上記の動詞が単純過去になっている例は 1 つもない。また未来についても同じことが言える。

*Je sortirai quand { j'aurai fini / *je finirai }.* 私は終わったら出かけます。

【考察】

これは一見すると矛盾しているようにも感じられる。*finir* などは動詞の意味からして「終わる」「終える」なのだから、単純過去形に置かれても事態の完了ははっきりしているので前過去形にする必要はないように見えるからである。しかしそれは誤解である。*finir* は *sortir* などと同じように、事態の完了までにいくつもの局面がある。このため容易に半過去にすることができる。

J'achevais d'écrire une lettre lorsqu'elle est entrée dans mon bureau.

彼女が書斎に入って来たとき、私は手紙を書き終えるところだった。

d. 動詞が *avoir, être, se trouver, rester, se taire, savoir, connaître, falloir, pouvoir, devoir, vouloir* などの持続動詞で、*quand* 節が表す事態と主節が表す事態とが一部重なっているときには前過去形にならず単純過去形にする。

Dès que je l'eus dans mes bras, [...] je compris que je n'arriverais pas à danser.

彼女を腕にかかえるとすぐ、踊れないだろうということが分かった。

Quand Georges se tut, il y eut un long silence.

ジョルジュが口をつぐむと長い沈黙があった。

Quand il connut le départ de Tristouse, il ne protesta pas.

トリストゥーズの出発を知ったとき、彼は反対しなかった。

(4) *quand* 節における動詞時制の選択は次のようになることがわかる。

a. quand 節の動詞が *apercevoir, reconnaître* のような瞬間動詞のとき

→前過去形も単純過去形も可能で意味のちがいはない

Quand il {aperçut / eut aperçu} un agent de police, il fit demi-tour.

警官の姿を見かけると彼は引き返した。

→日常語では〈複合過去—複合過去〉の組み合わせになる。

Quand il a aperçu un agent de police, il a fait demi-tour.

b. *sortir, arriver* などの到達動詞か *avoir* などの状態動詞で、事態が一部重なっているとき

→前過去形にはせず単純過去形にする

Il s'écria quand il sortit de la salle de bains.

浴室から出るときに彼はアッと叫んだ。

→日常語では〈複合過去—複合過去〉の組み合わせになる。

Il s'est écrié quand il est sorti de la salle de bains.

c. *partir, arriver* などの動詞で「事態の完了」を明示したいとき、および動詞が *finir, achever* など終了を表す動詞のとき

→quand 節の動詞は前過去にしなくてはならない

Quand elle fut sortie, il reprit son travail.

彼女が出ていってしまうと、彼は仕事を再開した。

Le jour se leva quand il eut terminé.

彼が仕事を終えてしまったとき、夜が明けた。

→日常語では〈複合過去—複合過去〉の組み合わせにするのがふつう。

Quand elle est sortie, il a repris son travail.

Le jour s'est levé quand il a terminé.

しかしこれでは「彼女が出て行く」と「仕事を再開する」が同時であるという解釈を排除できない。

14. まとめ

(1) なぜ次の例文で *quand* 節の前過去形に代わって大過去形を用いることができないとされるのかが問題であった。

a. Quand il eut fini, il se leva. 彼は終えてしまうと立ち上がった。

b. *Quand il avait fini, il se leva.

(Gougenheim, G., *Système grammatical de la langue française*, d'Artrey, 1939)

c. Je suis parti quand il avait terminé son discours.

彼が話を終えた時、私は帰って行った。

朝倉は Sauvageot, *Les procédés expressifs du français* (Klincksieck, 1957) の挙げた例 c を「ほとんど用いられない」と否定している。

いずれも動詞は *finir, terminer* で終了を表す動詞で、(4) c. で示したように *quand* 節に前過去が要求される場合である。

(2) 前過去形と大過去形のアスペクト的意味価値のちがい

11 節で前過去と大過去の事態の定位の仕方のちがいを見た。大過去は多くの場合すでに設定されている基準点を中心場面として「それより過去」に事態を定位するが、前過去は主節の単純過去が表すまだ存在しない中心場面を先取りして、「それより過去」に事態を定位するのであった。しかしこの定位の操作のちがいでは上記 (1) a. b. の容認度の差を説明することができない。

ここには大過去と前過去の助動詞が担うアスペクトのちがいと関係していると考えられる。

a. 前過去形

単純過去形の完了形で事態の完了を表す。多くは単純過去形との組み合わせで、完了した一回きりの事態を表す。大過去形と異なり、継続・反復・習慣を表さず、完了の結果としての状態を表さない。(朝倉季雄『新フランス文法事典』のまとめ)

Quand elle eut disparu dans l'immeuble solennel, il se mit à descendre à pied vers la Seine. 彼女がどっしりとしたビルの中に姿を消したとき、彼は歩いてセーヌのほうに下り始めた。

b. 大過去形

完了した事態の結果である過去の状態を表す。

Le 20 octobre, il avait terminé son roman.

10 月 20 日には彼は小説を書き終えていた。

過去から見た過去、「過去における過去」を表す。

J'avais retenu de confortables cabines et nous avons fait une excellente traversée.

私は快適な船室を予約しておいた。そして我々はすばらしい航海をした。

大過去形は継続・習慣・反復を表すことができる。

Tout le jour, ils avaient parlé, mais maintenant il n'y avait plus rien à dire.

一日中話をしたが、今ではもう何も言うことはなかった。

Dès que sa mère était revenue des vêpres, il lui consacrait la fin de la journée.

母親が晩課を済ませて帰って来ると、彼はゆうべの時間を彼女のために当てるのが常だった。

(朝倉季雄『新フランス文法事典』のまとめ)

(3) 鍵となるのは前過去と大過去の助動詞のちがいだと思われる。前過去の助動詞は単純過去 (*eut / fut*) で、一度きりの点括的事態を表し、継続・反復を表さない。一方、大過去の助動詞は半過去 (*avait / était*) で、本来一度きりの点括的事態を表さず、継続・反復を表す。したがって次の組み合わせが本来のものである。

a. 単純過去形—前過去形

Quand il eut fini de parler, il partit.

彼は話し終えると立ち去った。

b. 半過去形—大過去形

Il disait n'importe quoi quand il avait bu.

彼は酒を飲むとでたらめを言うのが常だった。

大過去形は助動詞が半過去形なので、上の例 *quand il avait bu* のように反復・習慣と結果状態（酒を飲んだ→酔っている）を表すのが本来のアスペクト価値である。

**Quand il avait fini, il se leva.* のように *quand* 節で大過去を用いて主節の単純過去に対する先行性を表そうとしても無理が生じる。

①〈*quand*＋半過去〉が容認されないのと同じく、〈*quand*＋大過去〉も助動詞が半過去であるため、事態の開始点も終了点も示すことがなく、事態を時間軸上に定位する力がない。

??*Quand il dormait, le téléphone a sonné.*

彼が寝ていると電話が鳴った。

② それに加えて大過去の助動詞の半過去は本来、反復・習慣・結果状態を表すアスペクト価値を持っているため、主節の単純過去に先立つ一度きりの事態を表すのに適していない。

Quand il arriva à la gare, le train était parti.

彼が駅に着いた時、列車はもう発車した後だった。

このような要因の複合的作用の結果として、**Quand il avait fini, il se leva.* の容認度は下がるのだと考えられる。

(4) しかし上に述べたことは *quand* 節に限ったことであることに留意しておこう。

quand は主節と従属節の事態の（ほぼ）同時性を表す。

a. *Il a commencé de pleuvoir quand je suis entré dans un café.*

私がカフェに入ると同時に雨が降り出した。

しかし「大過去は *à peine* のあとで前過去のかわりに用いられる」（田辺貞之助『現代フランス文法』白水社 1955）という指摘がある。

b. *À peine avais-je fait trois journées de chemin, que je fus reconnu par des soldats.*

私はようやく三日の道を歩いたばかりで、兵士たちに見つかりました。

c. *J'avais à peine achevé mon repas qu'un visiteur entra.*

ようやく食事をすますかすまさないうちに、客が入ってきた。

これは *à peine* の時間的意味によって、大過去が表す事態が主節の単純過去が表す事態の直前に定位されることが明らかであるため、上記 (3) の① ②で指摘した大過去のアスペクト価値を打ち消す (override) からだと考えられる。第 12 節の(3)に挙げた事例も全部 *à peine, dès que* の例であった。

15. 英語の過去完了形とフランス語の大過去形の比較研究

フランス語の *quand* 節とは異なり、英語の *when* 節では過去完了形が自由に使える。

(1) Swan, M., *Practical English Usage*, Oxford University Press, 1980.

424 past perfect (2): advanced points

[1] past perfect or simple past with *after*, *as soon as*, etc

We can use time conjunctions (e.g. *after*, *as soon as*, *when*, *once*) to talk about two actions or events that happened one after the other. Usually the past perfect is not necessary in these cases, because we are not “going back” from the time that we are mainly talking about, but simply moving forward from one event to the next.

*After it **got** dark, we came back inside.*

*As soon as Jane **arrived**, we sat down to eat.*

*Once it **stopped** raining, we started the game again.*

However, we can use the past perfect with *after*, *as soon as* etc. to emphasize the second started.

She didn't feel the same after her dog **had died**.

As soon as he **had finished** his exams, he went to Paris for a month.

This use of the past perfect is especially common with *when*. (*When* has several meanings, so we often have to show the exact time relations by the verb form.) Compare:

-- *When I **had opened** the windows, I sat down and had a cup of tea.*

(NOT *When I opened the windows, I sat down....*: the first action was quite separate from the second.)

*When I **opened** the window, the cat jumped out.* (More natural than *When I had opened the window, ...*: one action caused the other.)

-- *When I **had written** my letters, I did some gardening.* (NOT *When I wrote my letters, I did some gardening.*)

*When I **wrote** to her, she came at once.*

424 過去完了 (2): 前進点

[1] *after*, *as soon as* などと伴に用いる過去完了または単純過去

after, *as soon as*, *when*, *once* などの時の接続詞は、相次いで起きたふたつの出来事の時間関係を表すために用いる。ふつうこの場合に過去完了は必要ではない。主に語っている時点から「過去に遡る」わけではなく、単にひとつの出来事から別の出来事へと移行するだけだからである。

*After it **got** dark, we came back inside.*

暗くなってから私たちは家の中に戻った。

*As soon as Jane **arrived**, we sat down to eat.*

ジェーンが着くとすぐに私たちは着席して食事を始めた。

*Once it **stopped** raining, we started the game again.*

雨が止むとすぐに私たちは試合を再開した。

しかし、ふたつ目の出来事の開始を強調するために、*after*、*as soon as* に過去完了を用いることができる。

*She didn't feel the same after her dog **had died**.*

飼い犬が死んでから、彼女は気分がすっかり変わってしまった。

*As soon as he **had finished** his exams, he went to Paris for a month.*

試験を終えるとすぐに彼はひと月滞在する予定でパリに出かけた。

このような過去完了の使用はとりわけ *when* 節に多い。*(when* には意味がいくつ

かあるため、動詞の時制によって時間関係を示さなくてはならない)

次を比較せよ。

a. *When I **had opened** the windows, I sat down and had a cup of tea.*

窓を全部開けてから、私は座ってお茶を一杯飲んだ。

(NOT *When I opened the windows, I sat down....*: the first action was quite separate from the second.)

(*When I opened the windows, I sat down...*ではない。ひとつ目の行為とふたつ目の行為の間は時間的に離れている)

b. *When I **opened** the window, the cat jumped out.* (More natural than *When I **had opened** the window, ...*: one action caused the other.)

私が窓を開けると、猫が外へ飛び出した。(When I had opened the window...よりも自然である。ひとつ目の行為がふたつ目の行為を引き起こした)

c. *When I **had written** my letters, I did some gardening.* (NOT *When I wrote my letters, I did some gardening.*)

手紙を書き終えると、すこし庭仕事をした。(When I wrote my letters, I did some gardening.ではない)

d. *When I **wrote** to her, she came at once.*

私が彼女に手紙を書くと、彼女はすぐにやって来た。

(2) 問題

なぜ英語の過去完了形はフランス語の大過去形とはちがって *when* 節で自由に用いることができるのだろうか。

【解答への手がかり】

- それは過去完了形と大過去形の助動詞のアスペクト価値のちがいに起因すると考えられる。

- 大過去形の助動詞は半過去形 (*avait / était*)であり、アスペクト的には「未完了」である。半過去形のアスペクト価値は継続・反復・習慣・結果状態であり、これが *quand* 節における大過去形の使用を阻害する要因となっていた。

- 一方、英語の過去完了形の助動詞は単純過去形 (*had*)である。*have* は本動詞としては持続動詞であるが (ex. *She has two children.*)、点括的事態も表すことができる

(ex. We had an excellent dinner.)。

・単純過去形の意味価値は次のようだとされている。

a. 過去の動作・状態を表す

He *studied* music while he *was* in Italy.

彼はイタリアにいたとき音楽を勉強した。

b. 過去の習慣的行為を表す

The ship *started* every Monday morning.

船は毎週月曜の朝に出港した。

c. 間接話法において直接話法の現在形に対応する

I said I *liked* dogs.

私は犬が好きだと言った。

d. 不変の真理を表す (Generic Past)

Care *killed* the cat.

心配は身の毒。

Faint heart never *won* fair lady.

弱気で美人を得たためしがない。

(勝又永朗『大学英文法』開文社 1966)

・be, know などの持続動詞の単純過去形 (I was, I knew)は過去の状態を表すが、それは単純過去形の時制としての特性ではなく、be, know など持続動詞の語彙的アスペクトによるものである。

・いずれにせよ英語の過去完了形の助動詞が置かれている単純過去形 (had)は、一度きりの点括的事態を表すことができる。このために when 節で過去完了形を用いたときに主節の事態に先行する一度きりの事態を表すことができるのだろう。

a. When morning *came*, the fog cleared away.

朝になると霧が晴れた。

(Onions, C. T., *Advanced English Syntax*, Kegan Paul, 1929)

b. As soon as he {*heard* / **had heard*} that, he turned pale.

それを聞いたとたん彼は真っ青になった。

(Curme, G. O., *Syntax*, Academic Press, 1931)

c. When he *had read* the letter, he burned it.

彼はその手紙を読み終わると、燃やした。

(安藤貞雄『現代英文法講義』開拓社 2005)

16. 談話における大過去形と過去完了形

(1) まず現在完了によって過去の場面を導入し、そのあと過去形に切り換えて、その場面についてさらに詳しい情報を与える場合が多い。

I have already *made* the acquaintance of the local doctor. His car *broke* down in front of the house and he *asked* if he could use our telephone.

私はもう地域のお医者さんと知り合いになった。お医者さんの車がうちの家の前で故障して、うちの電話を使わしてもらえないかと言われたのだ。

Joan *has moved* out of the building. She *said* she couldn't stand living on her own any more. ジョアンはその建物から引っ越した。彼女はもうそこに住むのは我慢できないと言った。 (レナート・デクラーク『現代英文法総論』開拓社 1994)

- (2) a. An American woman *has been killed* and five people injured after a man with a knife *attacked* people in Russel Square, central London. (*The Guardian*)

ロンドン中心部のラッセル・スクエアでナイフを持った男が人々を襲い、アメリカ人女性が殺されて 5 人が負傷した。

- b. American citizen in her 60s *has died* and five others injured after knifeman, 19, *went* on the rampage. (*Mail Online*)

19 歳のナイフを持った男が凶行に及び、60 代のアメリカ人が殺されて 5 人が負傷した。

- c. Emperor Akihito *has given* thanks to the gods for a bountiful autumn harvest, the last time he will perform one of the most important annual palace rites before abdicating next spring.

The Emperor *conducted* the Niiname-sai harvest ritual Friday at a shrine in the Imperial Palace illuminated by torchlight as traditional music was played.

(*Japan Times*)

明仁天皇は秋の豊作を祈願する新嘗祭で神々に感謝の祈りを捧げた (現在完了形)。来年春に退位が予定されており、天皇がこの宮中の最も重要な行事を行うのはこれが最後になる。

天皇は金曜日に宮中の神殿で新嘗祭を執り行った (単純過去形)。神殿は松明の明かりに照らされ、伝統の雅楽が演奏された。

- (3) ニュース報道などでは、最初にリード文では現在完了形を用いて出来事を報じ、続く詳報では単純過去形に切り換えて出来事を詳しく報じるというパターンがよく見られる。新聞記事を書く記者と読者は発話時現在 (to) を共有しており、発話時現在に基準点 (視点) を置く現在完了形を用いて、現在とのつながりを保ちつつ新しい出来事を時間軸上に定位するのが、新規な事態の自然な提示のやり方だからだと考えられる。

いったん出来事が提示されると、過去の出来事時 (ti) は話し手 (書き手) と聞き手 (読み手) の間で共有される。すると過去のどの時点について話しているのかがわかることになり、発話時現在を基準点として用いなくても事態を適切に時間軸上に定位できるようになる。このため現在完了形から単純過去形へと時制を切り換えるのである。

英語ではこのように「過去の出来事時の共有」が達成されると、発話時現在 (t₀) を中心とする〈現在時領域〉から過去の出来事時 (t₁)を中心とする〈過去時領域〉へと移行するのがふつうである。

N. B. ここで述べたことは新聞などのニュース報道などの談話ジャンルに限られる。小説などの語りの談話ジャンルでは、作者と読者の共犯関係に基づいて読者をいきなり作品世界に引き込むために、発話時現在を基準点として新規の出来事を提示するという手段はとらず、最初から単純過去形を用いて出来事を示すのがふつうである。

There *were* only two Americans stopping at the hotel. They *did not know* any of the people they *passed* on the stairs on their way to and from their room. Their room *was* on the second floor facing the sea. It also *faced* the public garden and the war monument. There *were* big palms and green benches in the public garden.

(E. Hemmingway, *Cat in the rain*)

(4) 文部科学省科学研究費補助金による共同研究「現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究」(代表者山村ひろみ 九州大学)

Agatha Christie, *The Thirteen Problems*, Harper Collins Publishers, 2002 (邦訳 中村妙子訳『火曜クラブ』早川文庫, 2003) のフランス語訳、イタリア語訳、スペイン語訳、ポルトガル語訳、ブラジルポルトガル語訳、ルーマニア語訳を比較対照し、用いられている動詞の時制・アスペクトを調査した。

その結果、他の言語に較べてフランス語版では大過去形の使用が格段に多いことがわかった。研究分担者の渡邊淳也はその理由として、フランス語では大過去形を連鎖的に用いることが多いことと、「説明の大過去」という用法があることを挙げている(渡邊淳也「フランス語の大過去 II」)

(5) 実例 1

【英語原文】

Of course I *asked* questions to the fishermen, etc., as to what they *'d seen*. They *were* eye-witnesses. And one woman *had* rather a funny story. I *didn't* pay any attention to it at the time, but it *came* back to me afterwards. She *insisted*, you see, that Miss Durrant *wasn't* in difficulties when she *called* out. The other *swam* to her and, according to this woman, deliberately *held* Miss Durrant's head under water. I *didn't*, as I say, pay much attention. It *was* such a fantastic story, and these things *look* so differently from the shore. Miss Barton *might have tried* to make her friend lose consciousness, realizing that the latter's panic-stricken clutching *would drown* them both.

【フランス語版】

Évidemment, j'*avais posé* des questions aux pêcheurs, à tous ceux qui *avaient été* témoins de l'accident. Une femme n'*avait raconté* une histoire bizarre à laquelle je n'*avais pas prêté* attention sur le coup, mais qui me *revint* plus tard. Elle *prétendait* qu'au moment

où elle **avait hélé** son amie, M^{lle} Durrant n'*était* pas en difficulté. D'après elle, l'autre l'*aurait rejointe* et lui *aurait délibérément maintenu* la tête sous l'eau. Comme je vous l'*ai dit*, je n'*avais pas fait* très attention à cette histoire. C'*était* extravagant et, vues de la plage, les choses *pouvaient* paraître si différentes ! M^{lle} Barton **avait** peut-être **tenté** de faire perdre conscience à son amie en voyant que celle-ci *allait* les faire couler toutes les deux dans son affolement.

【日本語版】

もちろん私は漁師たちにいろいろ事情をきいてみましたよ。かれらの目撃したことについてね。かけがえのない証人ですからね。ところが、一人の女が妙な話をしたんですよ。そのときはたいして気にもとめなかったのですが、あとになってひょっと思い出しましてね。この女はですね、ミス・デュラントが声をあげて呼んだときにはべつにまだどうということもなかったのだ。そこへもう一人の女性が泳ぎついて、故意にミス・デュラントの頭をおさえて沈めたのだといったのです。さっきも申し上げたように、私はたいして気にもとめずに聞いていたんですよ。あまりに突拍子もない話ですからね。こういったことは海岸から見ると実際とはずいぶんちがって見えるものですし、ひょっとしたらミス・バートンは、こう死にもの狂いでしがみつかれては、二人とも溺れ死んでしまうと考えて、友人を一時的に失神させようとしたのかもしれないしね。

(6) 事例 2

【英語原文】

[Yes, I know. That's what my nephew, Raymond West, would say. He'd tell me I hadn't shadow of proof. But I remember Walter Hones, who kept the Green Man.] Walking home with his wife one night she *fell* into the river — and he *collected* the insurance money! And one or two other people that *are* walking about scot-free to this day— one indeed in our own class of life. He *went* to Switzerland for a summer holiday climbing with his wife. I *warned* her not to go— the poor dear *didn't* get angry with me as she might have done— she only *laughed*. It *seemed* to her funny that a queer old thing like me should say such things about her Harry. [Well, well, there was an accident—and Harry is married to another woman now.]

【フランス語版】

Un soir qu'il *rentrait* chez lui à pied avec sa femme, celle-ci ***était tombée*** dans le fleuve et lui, il ***avait touché*** l'assurance ! Je *me rappelais* aussi deux autres personnes, qui *se promènent* toujours en liberté, dont l'une *appartenait* d'ailleurs à notre monde. Pendant les vacances d'été, il ***était parti*** grimper sur les montagnes suisses avec sa femme. J'***avais conseillé*** à celle-ci de refuser de le suivre, et la pauvre petite ne ***s'était pas fâchée***, comme elle aurait pu, elle n'***avait fait*** qu'en rire. Il lui ***avait paru*** très drôle qu'une bizarre vieille

chose comme moi puisse tenir des propos pareils sur son Harry.

【日本語版】

「ええ、わかっておりますわ。甥のレイモンド・ウェストもやはりそう申しますでしょうよ。証拠などひとかけらもないくせにつてね。でもわたし、ウォルター・ホーンズをおぼえておりますの。グリーン・マン館を経営していた男ですけど」ある晩、つれだって帰る途中で、奥さんのほうが川にころげ落ちて死んでしまったんですの——ホーンズはその結果、たいへんな額の保険金をものにしましてね。あの人ばかりじゃありませんわ。大手をふってそのへんを歩きまわっているような連中にいくつか、同じようなケースがございますわ——そのうちの一人などはわたしたちと同じ社会層の男ですよ。この人はある夏の休みに奥さんとスイスに山登りに行きました。わたし、奥さんにやめたほうがいいと言ったんですけど——さぞ怒るだろうと思ったのに、怒りはしませんでした——まあ、笑いとはばされてしまいましたの。わたしみたいな変わり者の年よりが、だいじなハリーのことを悪しざまにいうなんておよそこっけいに思えたでしょうね。[結局、事故がおこって——奥さんは死にました。ハリーは再婚しましたわ。]

(7) 上記の実例1と2によって、登場人物が過去の出来事を語る場面において（談話ジャンルは「語り」 *récit / narrative*）、英語では単純過去形を用いる場所でフランス語では大過去形を用いるケースが多いことが確認できる。過去の出来事の語りにおいて英語とフランス語とでは時制の使い方が異なるのである。なぜそうなるのだろうか。

【解答への手がかり】

その答の鍵は、フランス語の大過去形 (*J'avais dit*)と英語の過去完了形 (*I had said*)の助動詞のちがいにあると考えられる。フランス語の助動詞は半過去で、未完了アスペクトを持っている。一方、英語の助動詞は単純過去形で、総括アスペクト (*aspect global*)を持っている。この助動詞のアスペクトのちがいが過去の出来事を語る際の時制の使い方のちがいを生んでいると考えられる。

(8) 英語の動作動詞と状態動詞

英語の時制体系を考えると、状態動詞と動作動詞を区別する必要がある。動作動詞は進行形を取るが、状態動詞は進行形を取ることがない。状態動詞はそもそも状態を表すからである。逆に動作動詞の現在形は今起きていることを表すことができず、習慣的な意味になる。今起きていることを表すには現在進行形にする。

◆状態動詞：[状態] *be, have, resemble, consist, belong, own*

[知的活動] *know, remember, understand, think, believe*

[好き嫌い] *like, dislike, love, adore*

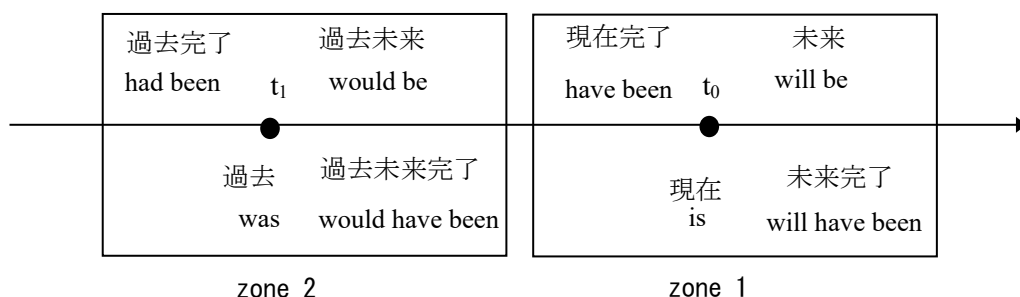
[欲求・願望] *want, hope, need*

[知覚] *see, hear, sound, smell, etc.*

◆動作動詞 : learn, run, take, put, jump, walk, look, listen, make, break, read, write, etc.

- a. I *know* the answer. →今、知っている
- b. *I *am knowing* the answer.
- c. I *run* 10 miles (every morning). →習慣として走っている
- d. I *am running*. →今、走っている
- e. I *see* the Eiffel Tower. →今、見えている。
- f. *I'm *seeing* the Eiffel Tower.

(9) 英語の時制体系（状態動詞の場合）

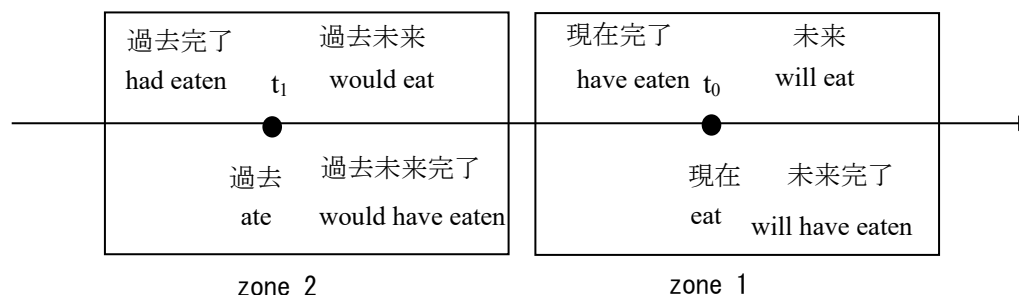


状態動詞の場合、英語の時制体系はフランス語と変わらず、2つの zone にまとめることができる。zone 1 と zone 2 の時制は従属節における時制の一致にきちんと対応している。

- a. She said, "I'm bored". 「私は退屈だ」と彼女は言った。
→ She said that she *was* bored.
- b. He said, "I've finished my homework." 「僕は宿題を済ませた」と彼は言った。
→ He said that he *had finished* his homework.
- c. She said, "I'll be in London next week." 「来週はロンドンにいるわ」と彼女は言った。
→ She said that she *would be* in London the following week.
- d. He said, "John will have arrived by noon."
「ジョンは正午までには着いているだろう」と彼は言った。
→ He said that John *would have arrived* by noon.

また zone 1 が発話時現在 (t_0) を中心として組織されているように、zone 2 は過去のある時点 (t_1) を中心として組織されている。過去の時点(t_1)は、「過去にずらされた現在」である。

(10) 英語の時制体系（動作動詞の場合）



動作動詞の時制体系を単純に 2 つの zone の図式に当てはめると上のようになる。しかしこの図式には大きな問題がある。動作動詞の現在形 (I eat) は、発話時現在 (t_0) に起きていることを表さない。このため現在形は中核時制として zone 1 の時制を組織する中心となることができない。

a. I eat cornflakes every morning. 私は毎朝コーンフレークを食べる。

b. I'm eating cornflakes. 私は（今）コーンフレークを食べている。

これと並行的に、動作動詞の単純過去形 (I ate) は、過去のある時点 (t_1) において起きていたことを表さない。単純過去形もまた中核時制として zone 2 の時制を組織する中心となることができない。

c. I ate cornflakes yesterday morning. 私は昨日の朝コーンフレークを食べた。

d. I was eating cornflakes (when he came).

私は（彼が来たとき）コーンフレークを食べていた。

(11) 中核時制と視点仮説

(A) 話し手が視点を置く視点中心を表すことができるのは未完了時制に限られる。ここで視点中心というのは、話し手がある時点 t_1 、もしくは t_1 に生じた出来事の場面に想像上で移動し（ワープして）、その場所に視点を置いて目の前で起きている出来事、それより以前に起きた出来事、それ以後に起きるであろう出来事を眺めて把握する、そのような認知上の抽象的地点である。

(B) 時制組織を構成する zone (Declerck の用語では time-sphere) の中核時制は、そこに立って過去や未来の出来事を眺めて把握する地点なので、未完了時制でなくてはならない。フランス語では zone 1 の中核時制は現在形で、zone 2 の中核時制は半過去形であり、この仮説に合致した構成となっている。フランス語で話し手が視点を置くことができるのは、現在形と半過去形だけである。

一方、英語の状態動詞では、現在形 (I am) と単純過去形 (I was) は未完了であり、視点中心となることができるので、それぞれの zone の中核時制として働くことができる。ところが動作動詞の現在形 (I eat) と単純過去形 (I ate) は未完了ではなく、総括アスペクト (aspect global) を持っている。このため視点中心となることができない。現在形と単純過去形が表す時点に話し手は視点を置くことができない。

(12) Declerck の **Vandage Time** (視点時)

I was reading a book. [過去進行形]

私は本を読んでいた。

Since then I've been working hard on my dissertation. [現在完了進行形]

その時以来私は論文に一所懸命取り組んでいる。

This time tomorrow I'll be flying to Morocco. [未来進行形]

私は今度は明日モロッコに飛ぶ予定だ。

I'm still studying the case. [現在進行形]

私は今もその件を調査している。

As is clear from these examples, it is irrelevant whether the speaker views the situation as past, pre-present, present or future. What matters is that he presents a view of the situation as if from within the situation, that is, from within the interval during which the whole situation takes place. In other words, progressive aspect requires that the speaker assumes a 'VANDAGE TIME' from which he views the situation as in progress ('ongoing').

(Declerck, Renaat, *The Grammar of the English Verb Phrase, Vol. 1 : The Grammar of the English Tense System*, Mouton de Gruyter, 2006, p.33)

これらの例から明らかなように、話し手が事態を過去と見るか、あるいは前現在・現在・未来と見るかは関係ない。重要なのは話し手が事態をあたかも内部から眺めているかのように表していることである。つまり事態全体が生起している時間インターバルの内部から見ているということである。言葉をかえれば、進行相では話し手は「視点時」を採用するのであり、視点時から事態を進行中のものとして眺めるのである。

(13) Finally, it was pointed out in Caenepeel (1989) that stative sentences in narrative texts have the potential of introducing a point of view or perspective other than that of the narrator. Interpreting a state as perspectivized means interpreting it as evaluated (perceived, contemplated, asserted) by a character in the narrative world. (...) In the case of perspectivization, the anchoring point at which the state is evaluated is activated as a point-of-view center, that is, as a deictic center in the textual world coinciding with the perspective of one or more characters in the text. In such cases the time on the narrative time line that is selected as point of evaluation is not merely used as a place to stop, at which the reader can evaluate properties of the narrative world; it also constitutes a point at which one or more state(s) of affairs are presented as perceived, evaluated, or reflected on by a character in the narrative world.

(Caenepeel, M., "Aspect and text structure", *Linguistics* 33, 1995, p. 230)

最後に Caenepeel (1989)では、語りのテキストにおいて状態動詞を持つ文は、語り手以外の視点を導入できると指摘されている。ある状態の記述を視点化されている (perspectivized) と解釈するということは、その状態が語りの世界の登場

人物によって値踏みされている (evaluated) (知覚されている、眺められている、断定されている) と解釈することである。(…) 視点化の場合、状態が値踏みされている地点は視点中心 (point-of-view center) として働く。つまり語りのテキストの世界の直示中心 (deictic center) となるのであり、それが物語世界の登場人物の視点中心なのである。このような場合、値踏みの時点として選ばれるタイムライン上の時点は、そこで読者が立ち止まり、物語世界の中のさまざまな特性を値踏みする地点として使われているだけではない。その時点はまた、物語世界の登場人物が、その世界のあり方を知覚し、値踏みし、考察を加えた時点として提示されているのである。